延岡市文化財調査報告書第31集

NOBEOKA－JYONAI

# 延岡城内遺跡Ⅲ

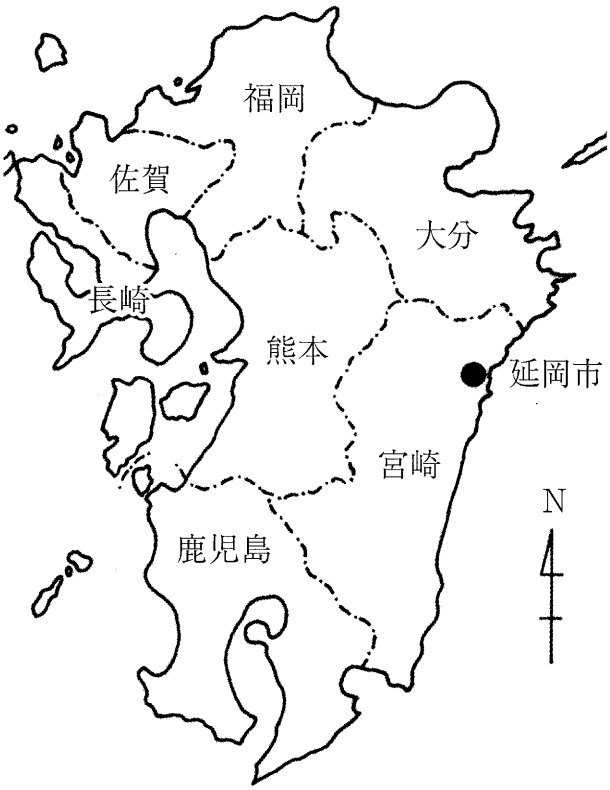
## 上下水道課新庁舎建設にかかる
## 延岡城内遺跡（第13次）発掘調査報告書

2005.3
延岡市教育委員会

NOBEOKA－JYONAI

# 延岡城内遺跡Ⅲ

## 上下水道課新庁舎建設にかかる
## 延岡城内遺跡（第13次）発掘調査報告書




2005.3
延岡市教育委員会

# 序　文

延岡市は、宮崎県の北部に位置し、東は砂浜海岸やリアス式海岸が日向灘に面し、西は高千穂の山々から早日の峰、行縢山を望み、市の中部から北部では、五ヶ瀬川・大瀬川・祝子川・北川といった一級河川が流れる自然豊かなところです。また一方では、これらの豊かな自然を利用した水力発電によって、県内最大の工業都市としても知られています。

延岡城跡は、延岡市の中心市街地となっている川中地区に位置し、北を流れる五ヶ瀬川南を流れる大瀬川に挟まれた、天然の独立丘陵を選地し築かれています。城の起源は、これまでの発掘調査等によって、室町時代頃から中世城郭としての利用が行われていたことが判っていますが、本格的には日向国最大の近世城郭として慶長８（1603）年、初代延岡（県）藩主高橋元種によって築城されたものです。延岡城跡は、九州管内でも有数の高さ約22mにも達する壮大な「千人殺し」石垣をはじめとする石垣群や、天守台・本丸・二ノ丸・三ノ丸といった各曲輪が、良好な状態で残っています。

今回の発掘調査は、延岡市水道局と下水道課の組織統合が予定されたことにより、移転先となる延岡市水道局内に新庁舎を建設することが計画されたため、これに先だって実施したものです。延岡市水道局周辺は、これまでの調査により武家屋敷に伴う井戸跡や石垣列、また、絵図に記載のない大溝等が所在していたことが明らかとなっています。

今回の発掘調査では、調査区の約1/2が近代の建物建設により破壊を受けていましたが、武家屋敷に伴う井戸跡や柱穴群が検出され、延岡城下における武家屋敷跡の様相の解明にさらに繋がるものと思われます。調査では、廃棄井戸跡を祀った土坑や、初出土となる銅銭が出土し、今後実施されるであろう延岡城下の調査において貴重な資料を提供してくれた遺跡となっています。

本書が埋蔵文化財への理解を深める一助になることを願うとともに、研究資料として活用いただければ幸いです。最後になりますが、発掘調査に際して、埋蔵文化財の保護にご理解と多大なるご協力を賜りました下水道課、延岡市水道局をはじめ、関係諸氏の皆様方に厚くお礼申し上げます。

平成17年３月31日

延岡市教育委員会
教育長　牧野　哲久

# 例　言

1．　本書は、延岡市上下水道部下水道課新庁舎建設にかかるものに先立って、延岡市教育委員会が実施した延岡城内遺跡（第13次）調査（延岡市本小路77－１）の発掘調査報告書である。

2．　本書にかかわる遺物および記録類の整理には、高浦　哲、敷石サヨ子、藤本千鳥、山本敬子があたり、同教育委員会の尾方農一氏の協力を得た。

3．　本調査にかかわる遺構写真は高浦が、遺物の写真については高浦、尾方があたった。

4．　本書の執筆・編集には、高浦があたった。

5．　本書の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北である。また、文中で方位を述べるにあたっても、磁北を基準としている。

6．　本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 柱穴 | → | Ｐ－１～ | 焼土坑 | → | ＳＣ－１ | 祭祀土坑 | → | ＳＣ－２ |
| 井戸遺構１ | → | ＳＦ－１ | 井戸遺構２ | → | ＳＦ－２ | | | |

7．　報告書掲載の遺物資料は、時間・経費等の制約から残存状態の良好な資料を中心に行った。したがって、掲載資料が本遺跡における遺構・遺物の性格・流通状況を示しているものではないことを予め断っておきたい。

8．　陶磁器の資料分析には、柳田晴子氏（宮崎県埋蔵文化財センター）からご教示をいただいた。

9．　本調査にかかわる空中写真は、（株）九州航空に委託した。

10．　本調査では、延岡市教育委員会社会教育課による「はらはら・わくわく探検隊」の一環として、2005年１月29日に市内の小学生45人が発掘体験を行った。

11．　本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、延岡市民俗資料館に収蔵・保管し、以後、延岡市内藤記念館にて公開する予定である。

# 本　文　目　次

第１章　はじめに
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1

第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　延岡城と周辺調査 …… 3

第３章　延岡城の歴史
　第１節　延岡城と藩主の変遷 …… 6
　第２節　延岡城関係年譜 …… 9

第４章　調査の概要
　第１節　絵図史料からの検討 …… 13
　第２節　調査の方法と基本土層 …… 13
　第３節　調査の概要 …… 14

第５章　調査の記録
　第１節　第１文化層（第７層上面）の検出遺構と遺物 …… 17
　第２節　第２文化層（第８層上面）の検出遺構と遺物 …… 22
　第３節　第３文化層（第９層上面）の検出遺構と遺物 …… 27
　第４節　第９層内の出土遺物 …… 29

第６章　まとめ
　第１節　第１文化層（第７層上面）の検証 …… 32
　第２節　第２文化層（第８層上面）の検証 …… 32
　第３節　第３文化層（第９層上面）の検証 …… 33
　第４節　終わりに …… 33

# 挿　図　目　次

Fig.１　延岡市位置図
Fig.２　調査地位置図 …… 2
Fig.３　延岡城および周辺調査地位置図 …… 4
Fig.４　調査区位置図 …… 13
Fig.５　グリッド配置図 …… 14
Fig.６　南壁土層断面図 …… 15
Fig.７　第１文化層遺構分布図 …… 18
Fig.８　第１文化層検出時出土遺物実測図１ …… 19
Fig.９　第１文化層検出時出土遺物実測図２ …… 20
Fig.10　第１文化層検出時出土遺物実測図３ …… 21
Fig.11　焼土坑実測図 …… 22

Fig.12　第２文化層遺構分布図 …… 23
Fig.13　祭祀土坑・井戸跡１・２・実測図 …… 24
Fig.14　第２文化層検出時出土遺物実測図 …… 26
Fig.15　第３文化層遺構分布図 …… 28
Fig.16　第３文化層検出時出土遺物実測図 …… 29
Fig.17　９層内出土遺物実測図 …… 29

# 表　目　次

第１表　延岡城および周辺調査地一覧表 …… 5
第２表　延岡城関係年譜１ …… 9
第３表　延岡城関係年譜２ …… 10
第４表　延岡城関係年譜３ …… 11
第５表　延岡城関係年譜４ …… 12
表６表　出土遺物観察表１（土器、銅銭、石・鉄製品） …… 30
表７表　出土遺物観察表２（陶磁器、瓦類） …… 31
表８表　報告書抄録 …… 40

# 写真図版目次

PL.１　有馬家中延岡城下屋敷付絵図 …… 8
PL.２　南壁土層断面 …… 16
PL.３　第１文化層遺構検出状況 …… 17
PL.４　不明高壇部検出状況 …… 17
PL.５　第２文化層遺構検出状況 …… 22
PL.６　焼土坑完掘状況 …… 22
PL.７　井戸跡１崩落壁面検出状況 …… 25
PL.８　第３文化層遺構検出状況 …… 27
PL.９　調査区全景１（西より） …… 34
PL.10　調査区全景２（垂直） …… 34
PL.11　井戸跡１・２全景１（垂直） …… 35
PL.12　井戸跡１・２全景２（東より） …… 35
PL.13　祭祀土坑洪武通寶出土状況 …… 35
PL.14　調査風景１ …… 35
PL.15　調査風景２ …… 35
PL.16　出土遺物１（陶磁器） …… 36
PL.17　出土遺物２（陶磁器） …… 37
PL.18　出土遺物３（土師器） …… 38
PL.19　出土遺物４（瓦質土器） …… 38
PL.20　出土遺物５（瓦類） …… 39
PL.21　出土遺物６（銅銭） …… 39
PL.22　出土遺物７（土・石・鉄製品） …… 39
PL.23　熙寧元寶・方篆治平・洪武通寶 …… 39
PL.24　犬形土製品 …… 39

# 第１章　はじめに

## 第１節　調査に至る経緯

延岡市上下水道部では、平成19年４月１日をもって延岡市水道局と下水道課の組織統合が予定されていた。このことから移転先となる、延岡市水道局内に新庁舎を建設する計画がなされた。新庁舎は、職員30数名の事務スペースの確保が必要となることから、水道局庁舎北側の現駐車場内に中二階建てで増築する案がなされた。

建設予定地は、延岡城内遺跡に位置し周知の埋蔵文化財包蔵地として取り扱われていることから、市教育委員会において事前の確認調査を実施した。確認調査は平成16年12月15日～12月27日にかけて実施した。

その結果、建設予定地内に昭和45年に建設され、平成13年に撤去された水道局電気管理棟の建物跡が確認された。この建物により予定地の約1/2が破壊を受けていたが、残部において井戸跡、武家屋敷に伴うと考えられる柱穴跡が検出された。

このことから予定地内に埋蔵文化財が確認されたため、市下水道課と計画変更等の協議を行った。その結果、組織統合は市の機構改革において事業の着手を早急に進める必要があり、また計画地のその殆どが破壊を受けていたことから計画の変更は不可能との見解に達し、上下水道部の経費負担によって確認調査で検出した井戸跡を中心とする予定地の本調査を行い、記録保存措置をとることとなった。発掘調査は約120㎡を対象とし、平成17年１月７日～平成17年３月１日の期間で実施した。

## 第２節　調査の組織

延岡城内遺跡（第13次）の調査組織は次の通りである。

調査主体　延岡市教育委員会

| | | |
|---|---|---|
| | 教育長 | 牧　野　哲　久 |
| | 教育部長 | 杉　本　隆　晴 |
| | 文化課長 | 渡　邉　博　吏 |
| | 文化課主幹兼文化財係長 | 九　鬼　　勉 |
| | 文化課副主幹兼文化振興係長 | 黒　木　育　朗 |
| 庶務担当 | 下水道課主査 | 野　下　美智江 |
| | 文化課主任主事 | 松　岡　直　子 |
| 調査担当 | 文化課主任主事 | 高　浦　　哲 |

調査作業員　安藤登美子、甲斐カツキ、甲斐正子、甲斐理司、甲斐三千代、甲斐如高、川野尚子、酒井清子、林田裕子、松崎辰磨

整理作業員　敷石サヨ子、藤本千鳥、山本敬子

発掘調査・資料整理に際しては、延岡市水道局・延岡市土地開発公社をはじめ周辺住民など関係各位のご協力を賜った。また、経費確保・執行に際しては、上下水道部公営企業移行対策監　濱村滋夫氏、下水道課主査　野下美智江氏、同課主任主事　山本陽一氏に格別のご配慮をいただいた。記して感謝します。

# 第２章　遺跡の位置と環境

## 第１節　地理的環境

野地古墳の所在する延岡市は、東経131°40′03″、北緯32°34′43″で宮崎県の北部に位置し、北は北川町・北浦町、西は北方町、南は門川町の４町と境を接し、東は日向灘に面している。東西27.6㎞、南北26.4㎞、面積283.82㎞²の市域を占めている。北は600m～700m級の鏡山・可愛岳等の山々が、西は800m～1,200m級の行縢山・桧山・榎峠等の山々が、南は300～360m級の遠見山・烏帽子岳等の山々が連なっている。市東部は海岸線で、北に日豊海岸国定公園に指定されているリアス式海岸が広がり、中部には、県指定天然記念物のアカウミガメが産卵のため上陸する長い砂浜が広がっている。南部は、日向灘に向かって小半島が突き出し、リアス式海岸を形成している。平野部は市域面積の約30%で、市の北と西から流れ込む北川・祝子川・五ヶ瀬川・沖田川の下流域に広がっている。

延岡城内遺跡は、市の中央を流れる五ヶ瀬川と大瀬川に挟まれた通称川中地区に所在している。川中地区は官公庁や学校、企業をはじめ宅地が集中し延岡市の中心地となっている。また一方では、市のシンボルである延岡城を中心に、西の丸（現内藤記念館）や江戸時代に整備された町割り、カラミ煉瓦塀（藩主内藤氏により経営されていた日平銅山から産出される残滓でつくられた煉瓦）などが残る歴史的景観を有する地区として都市景観形成地区に指定されている。今回の調査地は、延岡市水道局内の一角にあたり、現在は駐車場として利用されている場所にあたる。

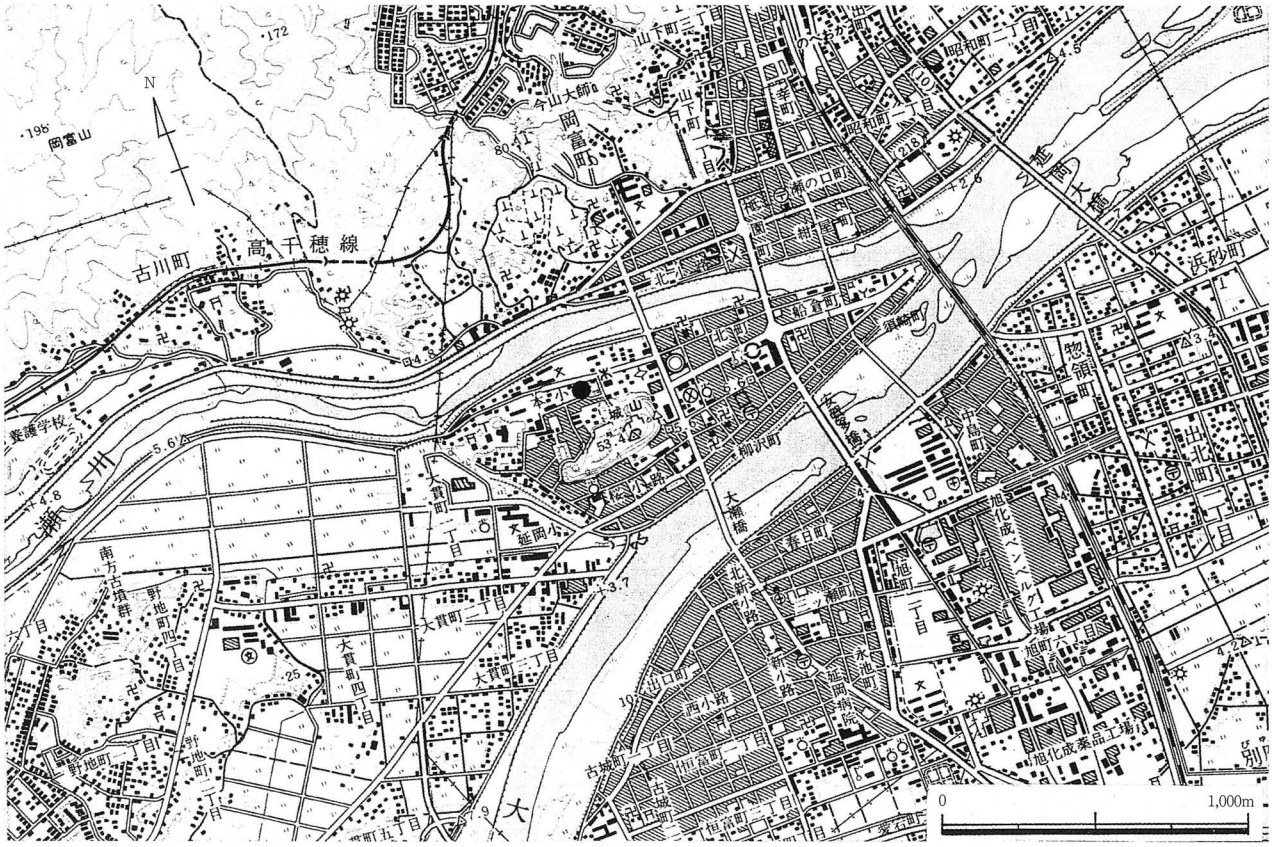



Fig. 2　調査地位置図（1/25,000）

## 第２節　延岡城と周辺調査

延岡城に関わる発掘調査の歴史は、内藤延岡４代藩主政韶によって行われた西ノ丸調査が最初と言われている。大正～昭和にかけては、延岡城二ノ丸北曲輪（牧水広場）の東斜面から横穴３基が確認されている。詳細は不明であるが土器・金環類が出土している。

平成元年度から延岡城公園整備がスタートし、それに伴い平成３年度から延岡城の調査を実施している。北大手門調査では、門礎石の基礎（桁行約5.4m、梁行2.7m）、平瓦を用いた排水溝、門番の番所跡が確認されている。この他、門の両側の石垣からは裾塀の屋根が接していたことを示す溝が見つかっている。またこの石垣には刻印と呼ばれる記号が400以上刻まれており、刻印の意味・役割を検討する上で重要な資料となっている。北大手門を登った二ノ丸口では２ヶ所の井戸跡が検出された他、本丸下に三ノ丸へと延びる石垣が検出されている。本城で最大の面積を持つ二ノ丸の調査では、両長軸に緑色岩の立石を伴う弥生時代後期の土壙墓１基が検出され、鉄鏃１本が出土している。この他、礎石建物跡の一部、城内最大規模の井戸、石組の排水溝（または通路遺構）、直径５ｍにも及ぶ瓦溜が検出されている。また、二ノ丸北曲輪（現管理棟）からは石列遺構や、動物園の基礎跡や猿ヶ島跡が確認されている。二ノ丸～本丸へ登る階段部付近の調査では、階段跡の一部や阿蘇溶結凝灰岩を方形に加工した根石を伴う掘建柱門跡（長坂御門）、石垣に沿って土塀の基礎が確認されている。この他、階段部中央で排水遺構が確認され、階段を登り切った曲輪では、絵図に描かれている小石垣の裏込めグリ石が検出されている。また、長坂御門から左に折れた園路部では南北に通路を遮断するように造られた中世期の堀切が検出されている。これにより、中世の城郭として機能していたことを伺わせる資料が初めて確認されている。本丸北東に位置するトイレ改修に伴う調査では、石垣に沿って土塀の控柱跡が検出されている。本丸から天守台へ登る通路では階段跡を検出している。天守台の調査では、東法面からは絵図に記載があるよう階段跡が確認されている。

延岡城南下駐車場（中小企業センター裏）の調査では、米蔵や武具蔵の基壇跡や溝状遺構、柵列跡が検出されている。カルチャープラザのべおか（図書館）建設に伴う調査では、東西方向に築かれた素堀の堀（内堀）が検出されている。この堀の土手には、長さ約1.5mの松杭が打ち込まれ、間には栗石が敷き詰められ護岸と成していた。また、高橋元種時代に描かれたと考えられる「日州縣ノ図」（臼杵市立図書館蔵）にのみに記載のある南北方向の内堀が、東西堀と「Ｌ」字形に接するよう確認された。この他、馬屋跡や井戸跡、中世の掘建柱建物跡が検出されている。さらに調査から、県内初となる弥生時代後期後半の足跡や矢板、鍬などの木製農耕具が出土している。

本小路通線道路改良工事に伴い生じた、水道局電気室移転に伴う発掘調査〈延岡城内遺跡Ⅰ（３次）〉では、溝状遺構や井戸跡、石垣遺構、大溝遺構が検出されている。特に大溝遺構は絵図史料に記載のないものであり、本城下の内堀に続くものか、延岡城の普請と作事に関係するものとして考えられている。また、同道路改良工事に伴う発掘調査（第４次）では、絵図にある清水口門の礎石が検出され、城域の西端を決定する結果が、また第５次調査では、延岡城北側に築かれた内堀跡の一部を確認し、城域の北端を決定する結果が得られている。また各調査地において、遺構の確認は出来なかったが、弥生時代の遺物が大量に出土している。

城下南町の調査では、間口が狭く奥行きが長い典型的な短冊形の町屋遺構の一部や、建物間を流れる水路跡、水路に下りる階段跡が検出されている。中町通り整備工事の際には弥生時代後期後半の土器類が確認されている。

これらの本城、西ノ丸及び周辺の調査から、延岡城の位置する川中地区は、弥生時代から江戸時代にかけての遺跡が残る遺跡群として捉えられている。

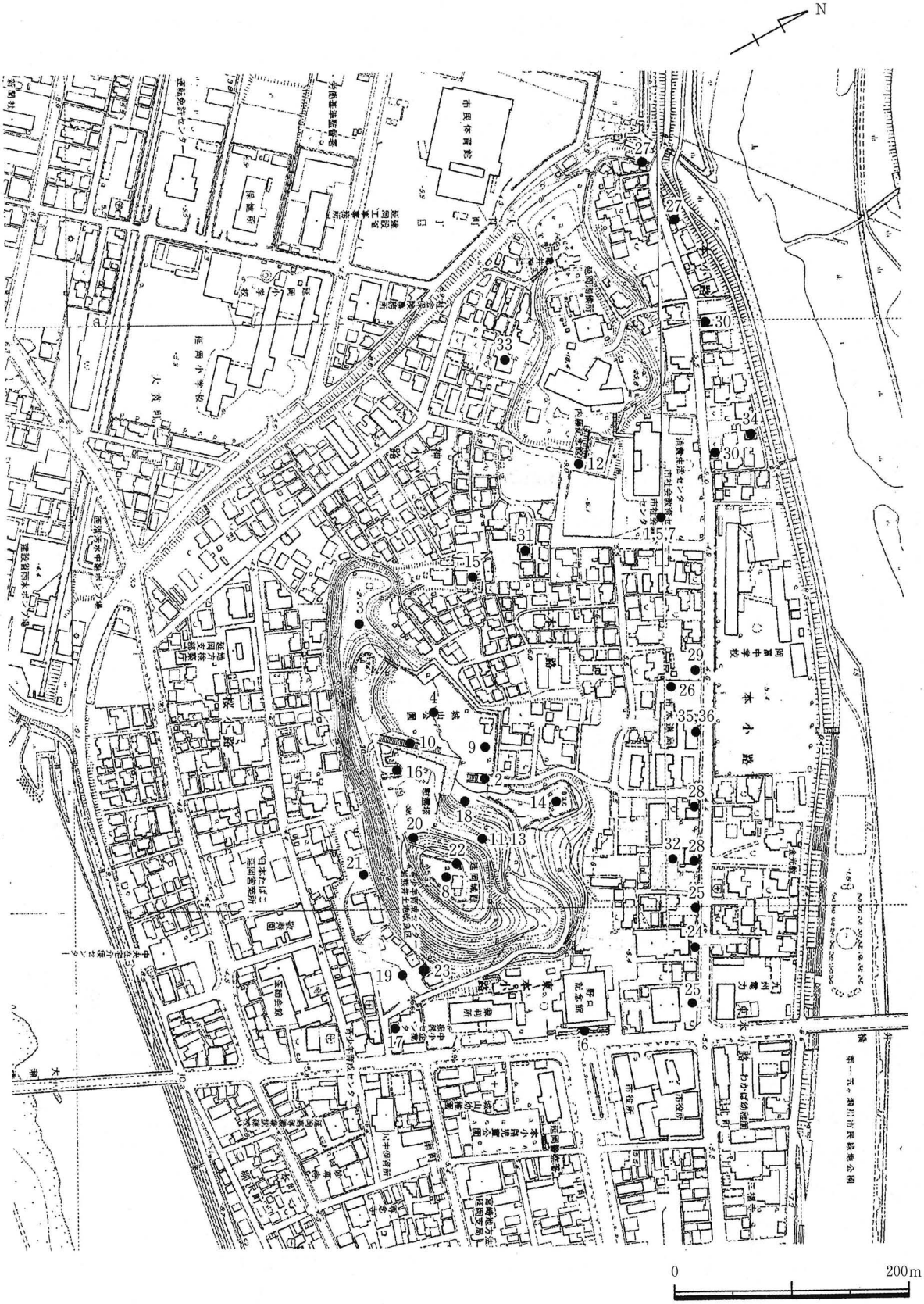



Fig. 3　延岡城および周辺調査地位置図（1/5,000）

延岡城発掘調査一覧

| No | 調査次 | 名　　称 | 調査種別 | 調査年 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 第１次 | 内堀（第１次） | 確認調査 | 平成４年 |
| 2 | 第２次 | 北大手門 | 確認･本調査 | 平成４年 |
| 3 | 第３次 | 二ノ丸口・二ノ丸西曲輪 | 確認調査 | 平成５年 |
| 4 | 第４次 | 二ノ丸（第１次） | 本調査 | 平成５年 |
| 5 | 第５次 | 内堀（第２次） | 本調査 | 平成５～６年 |
| 6 | 第６次 | 行縢の滝広場 | 確認調査 | 平成６年 |
| 7 | 第７次 | 内堀（第３次） | 本調査 | 平成６年 |
| 8 | 第８次 | 天守台 | 本調査 | 平成６～７年 |
| 9 | 第９次 | 二ノ丸（第２次） | 本調査 | 平成７年 |
| 10 | 第10次 | 本丸階段 | 本調査 | 平成８年 |
| 11 | 第11次 | 本丸長屋（第１次） | 確認調査 | 平成９年 |
| 12 | 第12次 | 西ノ丸東虎口 | 確認調査 | 平成９年 |
| 13 | 第13次 | 本丸長屋（第２次） | 本調査 | 平成10年 |
| 14 | 第14次 | 牧水広場 | 確認調査 | 平成10年 |
| 15 | 第15次 | 林友寮 | 確認調査 | 平成10年 |
| 16 | 第16次 | 二階門 | 本調査 | 平成11年 |
| 17 | 第17次 | 中企センター南 | 本調査 | 平成11年 |
| 18 | 第18次 | 二ノ丸口・三ノ丸 | 本調査 | 平成11年 |
| 19 | 第19次 | 米蔵・武具蔵 | 本調査 | 平成12年 |
| 20 | 第20次 | 天守台登口（第１次） | 本調査 | 平成13年 |
| 21 | 第21次 | 米蔵・武具蔵（第２次） | 本調査 | 平成13年 |
| 22 | 第22次 | 天守台登口（第２次） | 本調査 | 平成14年 |
| 23 | 第23次 | 米蔵・武具蔵（第３次） | 本調査 | 平成14年 |

延岡城内発掘調査一覧

| No | 調査次 | 名　　称 | 調査種別 | 調査年 |
|---|---|---|---|---|
| 24 | 第１次 | 旧図書館前 | 確認調査 | 平成11年 |
| 25 | 第２次 | 健康管理センター前 | 本調査 | 平成11年 |
| 26 | 第３次 | 水道局 | 本調査 | 平成12年 |
| 27 | 第４次 | 清水口 | 本調査 | 平成12年 |
| 28 | 第５次 | 北内堀 | 本調査 | 平成12年 |
| 29 | 第６次 | 水道局前 | 本調査 | 平成13年 |
| 30 | 第７次 | カルチャープラザ前 | 本調査 | 平成13年 |
| 31 | 第８次 | 武家屋敷 | 確認調査 | 平成13年 |
| 32 | 第９次 | 北内堀 | 確認調査 | 平成14年 |
| 33 | 第10次 | 内藤記念館南 | 確認調査 | 平成15年 |
| 34 | 第11次 | カルチャープラザ北 | 確認調査 | 平成16年 |
| 35 | 第12次 | 水道局 | 確認調査 | 平成16年 |
| 36 | 第13次 | 水道局 | 本調査 | 平成17年 |

第１表　延岡城および周辺調査地一覧表

# 第３章　延岡城の歴史

## 第１節　延岡城と藩主の変遷

延岡城は延岡市はもとより、宮崎県を代表する近世城郭である。天正15年（1578）、豊臣秀吉の命により53,000石で県（延岡）に入封した高橋元種は松尾城に入った。元種は慶長５年（1600）、関ヶ原の合戦で西軍方に属していたが、東軍に転じたことから本領安堵となり領地没収を免れた。合戦後松尾城に戻った元種は、鉄砲の普及による近代的戦法に対応するため、石垣や水堀を主体とする近世式城郭の必要性を痛感し、慶長６年（1601）～慶長８年（1603）にかけて県城（延岡城）を築城した。

延岡城は、五ヶ瀬川と大瀬川に挟まれた標高約53mの丘陵に築かれた平山城で、「県城」「亀井城」とも称されている。城の南北を流れるこの二つの河川を天然の外堀とし、丘陵裾に内堀、城の東に位置する城下町との境には、南北に堀や土居が造られている。城郭は丘陵に石垣を築き、本丸、二ノ丸、三ノ丸の三区から成る本城（城山公園）と、本城の西に築かれた西ノ丸（内藤記念館）の二郭から構成されている。本丸と二ノ丸の間に築かれた高さ約22m、総延長約70mの石垣は本城最大規模で通称「千人殺し」と称されている。「千人殺し」とはその規模、構造から石垣の隅石を外すことで、千人の敵を倒すことができるとの伝承からこの名称がつけられたと言われている。また、高橋元種は本格的な城下町造りに着手し、城の東に北町、中町、南町が整備され、現在の延岡市街地の基礎が築かれている。武家屋敷としては五ヶ瀬川の北に北小路、本城の南北に本小路、桜小路が完成されている。このように延岡市街地の基礎を造った元種であるが、慶長18年（1613）罪人隠匿の理由で改易されている。

高橋氏が改易された後、肥前国日之江城（長崎県北有馬町）から有馬直純が、53,000石で入封した。有馬氏は直純、康純、永純と三代続き、この間に延岡城と改名された。明暦２年（1656）、藩主有馬康純が今山八幡宮に寄進した梵鐘に「日州延岡」の文字が刻まれており、延岡の名が見られる最古の史料となっている。またこの頃、城下町も大幅に拡張整備された。元和元年（1615）、直純により元町、紺屋町、博労町の三町が整備された。1655年（明暦元）、康純の時に柳沢町ができ、ここに「延岡七町」と称される城下町が完成した。本城も承応２年（1653）～明暦元年（1655）にかけて大修築が行われ、本丸東側に天守閣の機能を有する三階櫓、本丸の枡形に二階門櫓等が完成している。しかし、天和２年（1682）（天和３年の説あり）、本小路の武家屋敷からの火災により三階櫓等が焼失している。以後、城郭の復興は行われたが三階櫓は再建されなかったことが古文書によって確認されている。元禄３年（1690）、永純の時、藩領であった山陰・坪谷（宮崎県東郷町）の百姓1,422人が隣国の高鍋藩へ逃散する山陰百姓逃散一揆が起こった。有馬氏はこの事件がもととなり、元禄５年（1692）、無城地であった越後国糸魚川（新潟県糸魚川市）に転封となった。

元禄５年（1692）、日向国初の譜代大名として下野国壬生（栃木県壬生市）から三浦明敬が23,000石で入封した。同時にそれまでの藩領であった、富高（宮崎県日向市）や穂北（宮崎県西都市）、坪谷（宮崎県東郷町）など30,000石が天領として分離された。三浦氏は23,000石と歴代延岡藩主の中で最小の大名であった。正徳２年（1712）、三河国刈谷（愛知県刈谷市）へ転封となった。

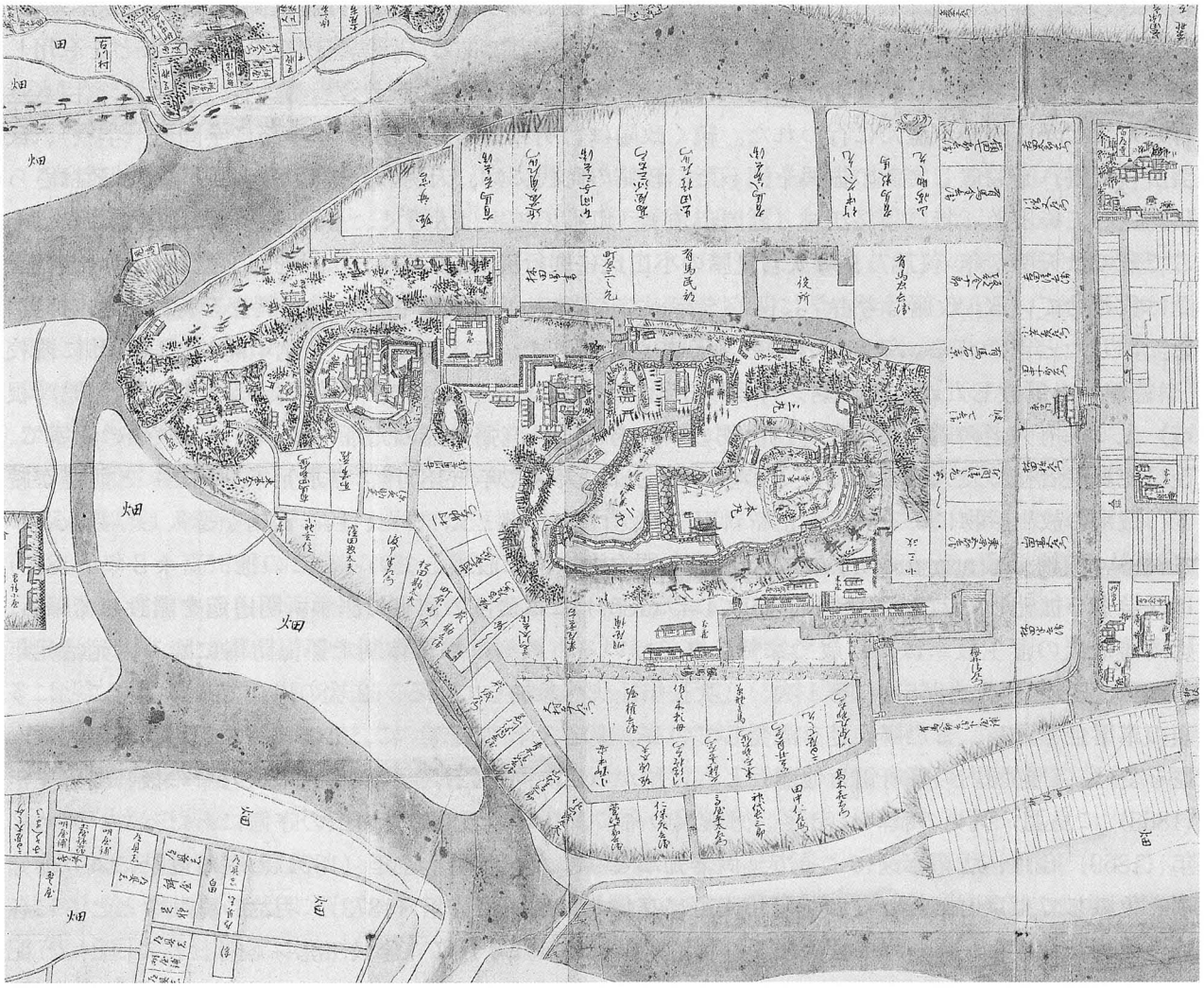
その後を継いだ牧野氏は、三河国吉田（愛知県豊橋市）から天領であった領地を回復し、さらに豊後の大分、国東、速見に飛び地を領有し、延岡藩最大の80,000石で入封した。牧野氏は成央、貞通の二代が続いた。藩領は増加したものの、この当時の藩財政は窮乏しており、このため新田開発、殖産興業等が必要となった。こうした背景から、享保９年（1724）に家老藤江監物が郡奉行江尻喜多右衛

門に命じて岩熊井堰工事を実施した。この事業は五ヶ瀬川を堰き止めて、当時水利の便が悪く水田の乏しい出喜多（出北）村に用水を引くという大工事であった。洪水等度重なる失敗により、藩の財政は更に悪化し、藩内では恨みを持つものも現れた。享保16年（1731）、藤江は三人の息子と共に捕らえられ、舟之尾（宮崎県日之影町）の牢で非業の死を遂げた。工事は中止論もでたが、後を受けた江尻喜多右衛門は工事を続行し、着工から10年後の享保19年（1734）、井堰と用水路を完成させた。その結果、出喜多（出北）村、恒富村の田地131町（約131ha）が灌漑されることとなった。改修は行われているものの、現在もこの用水路は活用され豊かな延岡平野の礎となっている。寛延２年（1749）、牧野貞通は京都所司代の要職につき、藩領のうち児湯郡、宮崎郡のうちの30,000石は河内国、丹波国、美濃国において引替えとなり、再び天領となって日田代官支配下に置かれた。延享４年（1747）、貞通は僻遠の日向では不便なため常陸国笠間（茨城県笠間市）へ転封となった。これに伴い笠間の井上氏は陸奥国磐城平（福島県いわき市）へ、磐城平の内藤氏は日向国延岡へと三角転封が行われた。

延享４年（1747）、内藤氏が70,000石で入封し、政樹、政陽、政脩、政韶、政和、政順、政義、政挙と８代にわたり明治の廃藩置県まで延岡を治めた。延岡最初の藩主政樹は、実質磐城平藩と同じ70,000石で入封したが、飛び地や山野が多いことから20,000石程の減収と言われた。内藤時代には飢饉等の災害もあり慢性的な財政赤字に苦しみ、度々倹約令を出し、家中の知行扶持削減を断行、また一方では藩札の発行など行った。しかし、これらの諸策は成功せず、延岡商人や大阪の豪商の財力に頼らざらるを得ない状況であった。このような藩財政であったが歴代の内藤延岡藩主は学問等の興隆に力を注いでいる。政樹は数学・天文学を愛好し、数学者である久留島喜内や松永良弼などを登用した。また、俳人でもあり父義英（露沾）に俳諧を学んで俳号を沾城とした。露沾に師事した家臣も遂行したことから俳諧が盛んに行われた。続く政陽は、明和５年（1768）、本小路に学問所（学寮）、武芸所（武寮）を設置し文武の振興を図った。政脩の時代には、天明の大飢饉が起こり藩の財政はさらに窮乏していった。特に須怒江村（延岡市須美江町）の被害は大きく、農民の逃散が危惧された。そこで藩では天明７年（1787）、町人岩見屋の小田氏に知行300石で本締方下役を与え須怒江村の復興を請け負わせている。政韶は考古学に関心を持った人物で、西ノ丸や古墳の発掘調査を行い「集古採覧」を記録したと言われる。政和は20歳という若さで没した。続く政順は、文化年間に江戸藩邸に藩校「崇徳館」を開設したが、財政窮乏により閉鎖をやむなくされた。続く政義は、彦根藩（滋賀県彦根市）主で幕府大老の職にあった井伊直弼の弟にあたる。直弼の姉の充姫（繁子）は、政順の正室で、後に充真院となった人物である。この頃の藩内は、天保12年（1841）、嘉永元年（1848）と飢饉が続き、蔵米の放出穀物による酒造禁止や新田開発が行われている。また、西洋砲術を導入し、嘉永２年（1849）、加納（Ｃａｎｎｏｎ，カノー）砲４門を海岸部に設置している。この他、嘉永３年（1850）には学寮を拡充して広業館に改称、安政４年（1857）には藩内の南町に医学所明道館を開設している。延岡藩最後の藩主政挙は、11歳で家督を継いでいる。政挙は挙藩体制で領海防備に臨み、元治元年（1864）、慶応２年（1866）に第１次、２次長州征伐へ参加している。２次の出兵では町・村ごとに多額の軍用金を課し、また郷人足を徴発している。慶応３年（1867）に、第15代将軍徳川慶喜の大政奉還を受け、日向国内の幕府領を他藩とともに預かった。同年12月、大政復古の大号令の後、慶応４年（1868）に鳥羽・伏見の戦いに出兵、徳川氏の命により京都郊外の野田口の守備にあたった。明治２年（1869）６月、版籍奉還によって延岡藩知事となったが、明治４年（1871）、廃藩置県により藩知事を免職して東京府華族となり麹町隼人町に在住した。明治５年（1872）、明治の廃城令とともに各地の城郭取り壊しが行われ、延岡城では明治４年（1871）６月に「藩城ヲ廃シ薬園トナス」という記録が残っている。このことから、この時期に城の機能を廃止し、取り壊しが行われてと思われるが、

明治10年（1877）頃まで京口門が残っていたこと（内藤氏家令、小林天外氏の談）や、同年８月にあった西南の役の際、天守台の太鼓櫓が焼失した記録等が残っており、延岡城の破却についての詳細は分かっていない。その後政挙は明治23年（1890）、東京より帰延し旧延岡市立図書館付近にあった内藤末蔵宅（内藤政義の末子、内藤氏下御殿とも呼ばれた）に居住し、明治25年（1892）２月に西ノ丸跡に屋敷（西ノ丸御殿）を新築し転居した。政挙は教育普及事業に尽力し、明治６年（1873）１月４日に延岡社学（現岡富中学校付近）を設立（明治８年亮天社と改称）、明治36年（1903）４月の県立延岡中学校設立に伴う廃校まで支援した。また、女子教育にも力を注ぎ、明治９年（1876）４月に亮天社附属として女児校舎を建設、明治34年（1901）４月に延岡女学校と改称された。昭和２年（1927）の政挙没後、昭和４年（1929）敷地建物を県に寄付し県立延岡高等女学校となり、戦後の学制改革まで続いた。

延岡城は、明治40年頃には市民に開放されたとみられ、城内で撮影された写真が残っている。昭和９年（1924）４月、内藤政道氏から延岡市制施行を記念して延岡城跡の寄贈を受けた。また昭和14年（1939）８月には、西ノ丸土地邸宅及び附属施設等の寄贈を受けたが、昭和20年の戦災により邸宅等の殆どが消失した。昭和38年、市制施行30周年記念事業として西の丸跡地に内藤記念館を建設し、現在は市民に開放されている。一方、延岡城跡も戦後、市民動物公園として猿ヶ島などの整備や遊具施設が設置され市民憩いの場となっていたが、昭和63年（1988）にその殆どが解体されている。



PL.1　有馬家中延岡城下屋敷付絵図（1970～1683年）

## 第２節　延岡城関係年譜

| 西　暦 | 和　暦 | 月日 | 事　　項 |
|---|---|---|---|
| 1446 | 文安３ | 10月 | 土持宣綱は、松山町に松尾城築城 |
| 1496 | 明応５ | ８月 | 土持氏と伊東氏は、東海村夏田付近で合戦し、伊東方は敗北 |
| 1496 | 明応５ | ９月 | 再び伊東氏が侵入し、小雨潟(笹目橋付近)で合戦、伊東氏は敗北し門川城を離脱 |
| 1535 | 天文４ | 12月 | 門川城主と土持氏が協力し、伊東氏に対抗 |
| 1573 | 天正元年 | 不詳 | 伊東氏の勢力を背景に、機道和尚が恋島に曹洞宗祐国寺創建 |
| 1577 | 天正５ | ２月 | 土持親成が門川城の米良氏を攻め、門川町祇園馬場で合戦し、土持氏は敗北 |
| 1577 | 天正５ | 不詳 | 川島町の熊野権現神社が兵火のため焼失 |
| 1578 | 天正６ | １月 | 島津義久は土持親成に石塚百余町を加付し、土持栄続に御手洗村10町を付与 |
| 1578 | 天正６ | ４月 | 大友宗麟が豊後から南下し臼杵右衛門等を先鋒として日向入り。無鹿町に軍営を築き、土持氏の松尾城を陥れた。親成の子親信は薩摩に逃れ、高信は妙町で自刃した |
| 1586 | 天正14 | 12月 | 豊前国香春岳城主（福岡県田川市）高橋元種は、九州平定を進めていた豊臣軍の攻撃を受け降伏 |
| 1586 | 天正14 | 不詳 | 土持親信は、吾田に戻り旧臣を集め、島津氏と謀り大友氏の打倒を謀った |
| 1587 | 天正15 | ４月21日 | 島津義久は豊臣秀長に降伏し、九州平定がほぼ終了 |
| 1587 | 天正15 | ５月 | 豊臣秀吉は日向の諸侯を封じ、高橋元種は県を拝命 |
| 1591 | 天正19 | ４月 | 高橋元種は三田井親武（高千穂町）が反抗したため、宮水（高千穂町）で滅ぼした |
| 1591 | 天正19 | 不詳 | 川島町の熊野権現神社を再興 |
| 1598 | 慶長３ | 11月 | 高橋元種は三田井氏の遺臣を討ち、領内を平定 |
| 1600 | 慶長５ | 10月 | 徳川家康は伊東祐兵に命じ、相良、秋月、高橋の諸氏を通じて島津氏を伐たせた |
| 1600 | 慶長５ | 10月 | 高橋元種は関ヶ原の戦に出陣し、西軍方として岐阜大垣城の防衛に当たったが、東軍方に転じ本領安堵 |
| 1600 | 慶長５ | 10月 | 伊東祐兵が宮崎城を攻め、城主権藤種盛父子は戦死 |
| 1600 | 慶長５ | 10月 | 高橋元種は、53000石で入封し松尾城に入った。県城？、門川城（門川町）、潮見城・日知屋城（日向市）、宮崎城（宮崎市）を領した |
| 1601 | 慶長６ | 不詳 | 高橋元種は県城（延岡城）の築城に着手。城内にあった愛宕社を恒富町に移動した。県城の規模、東西百三十間、南北八十間、六千六百七十六坪、京口門、日向口門、野田口門、川原口門、肥後口門、豊後口門 |
| 1603 | 慶長８ | 秋頃 | 高橋元種は松尾城から県城に移った。北町、中町、南町の城下町、本小路、北小路、桜小路の武家屋敷を整備 |
| 1605 | 慶長10 | ２月 | 高橋元種は岡富八幡宮を再興 |
| 1605 | 慶長10 | ９月 | 高橋元種は行滕山の熊野大明神（行滕神社）に鰐口寄進 |
| 1607 | 慶長12 | 10月 | 今山八幡宮で神事能始まった |
| 1611 | 慶長16 | ４月 | 南町に称揚山妙専寺（浄土真宗）を創建 |
| 1613 | 慶長18 | 10月 | 高橋元種は、罪人隠匿の罪に問われ、領地を没収され陸奥国棚倉藩（福島県棚倉町）立花宗茂に預けられた |
| 1614 | 慶長19 | 11月 | 有馬直純が大坂冬の陣に出陣した |
| 1614 | 慶長19 | ７月 | 肥前国日之江城（長崎県北有馬町）の有馬直純が53000石で県（延岡）に入封 |
| 1614 | 慶長19 | 不詳 | 肥前国有馬山観三寺を大貫町に移して二岸山白道寺と称した |
| 1615 | 元和元 | 不詳 | 有馬直純は川北地区に元町、紺屋町、博労町を整備 |
| 1638 | 寛永15 | １月 | 島原の乱起こり、藩主直純は江戸から、子康純は県から出陣 |
| 1646 | 正保３ | ９月 | 有馬康純が岡富天満宮（亀井神社・天神小路）を創建 |
| 1651 | 慶安４ | | 御本丸の修築願を提出 |
| 1652 | 承応元 | ３月 | 石垣普請開始 |
| 1653 | 承応２ | ５月 | 有馬康純が小林山光勝寺に梵鐘寄進 |
| 1655 | 明暦元 | ６月 | 城の修復が完成し、二階櫓、三階櫓等が完成 |
| 1655 | 明暦元 | 不詳 | 柳沢町整備され、所謂延岡七町完成 |
| 1656 | 明暦２ | ６月 | 有馬康純が蓬莱山八幡宮（今山八幡宮）に梵鐘を寄進。梵鐘には「日州延岡城主有馬左衛門佐従五位藤原朝臣康純」とあり延岡の地名が記された最古の資料 |
| 1661 | 寛文元 | ９月 | 日向地震が起き、宮崎郡、那珂郡方面被害甚大 |
| 1667 | 寛文７ | 不詳 | 板田橋完成。長さ六十九間三尺、幅二間。南町今井又四郎が渡り初め |
| 1681 | 天和元 | ４月 | 延岡大雨にて御本丸東方坂石垣少々崩落 |
| 1683 | 天和３ | ２月 | 本小路から出火し城内に延焼、武家屋敷21軒、塀32間半、三階櫓等焼失、石垣崩落(天和２年) |

第２表　延岡城関係年譜１

| 西　暦 | 和　暦 | 月日 | 事　　項 |
|---|---|---|---|
| 1683 | 天和３ | ３月 | 大雨により、西ノ丸御長屋塀崩れ、長屋下石垣長さ11間、高さ４間共に崩落（天和２年説もあり） |
| 1686 | 貞享３ | 不詳 | 延岡城巽方塀土台下石垣１カ所、三の丸北の方石垣一カ所崩候に付、修補願いを提出 |
| 1689 | 元禄２ | ７月 | 洪水により板田橋流失 |
| 1690 | 元禄３ | ９月 | 山陰村（東臼杵郡東郷町山陰）で百姓逃散事件起きた |
| 1691 | 元禄４ | 12月 | 有馬永純が無城の地越後国糸魚川（新潟県糸魚川市）に50000石で移封 |
| 1692 | 元禄５ | ２月 | 下野国壬生城（栃木県壬生町）の三浦明敬が3000石を加増され、延岡藩初の譜代大名として23000石で入封 |
| 1694 | 元禄７ | 不詳 | 大貫町の三福寺を現在地（北町）に移動 |
| 1700 | 元禄13 | ９月 | 岡藩（大分県竹田）との梓山境界紛争は、延岡藩の勝訴（尾根境界説）で終了 |
| 1707 | 宝永４ | 10月４日 | 宝永地震　本丸櫓瓦所々落申候、同塀瓦所々落申候、帯郭門棟瓦落申候、同所石垣一カ所崩申候、同所一カ所震出申候、同所塀所々落申候、同所多門之前長八間余幅三寸ほど地割申候、其外城中所々地割申候、城下町屋十二軒半潰、内一軒潰申候、同所土蔵二十五軒大破、内一軒潰申候、津波被害有、　坂下御門脇石垣破損、同所塀下石垣同前、其外所々御家中鋪屋共に破損、　三ノ曲 |
| 1712 | 正徳２ | ７月 | 三浦明敬が三河国苅谷（愛知県刈谷市）に移封した |
| 1712 | 正徳２ | ７月 | 三河国吉田（愛知県豊橋市）の牧野成央が延岡藩最大の80000石で入封。飛地として豊後国の大分郡、国東郡、速見郡及び日向国の宮崎郡を領した |
| 1724 | 享保９ | 不詳 | 出北村（出北・別府地区）の灌漑のため、家老藤江監物が郡奉行の江尻喜多右衛門に命じて岩熊井堰及び用水路の工事を着手させた |
| 1731 | 享保16 | ８月 | 藤江監物は軍用金流用の嫌疑により幽閉され、七折村舟の尾（日之影町）の獄中にて死去 |
| 1734 | 享保19 | 不詳 | 岩熊井堰及び用水路が完成し、田畑122町１反５畝23歩増加 |
| 1747 | 延享４ | ４月 | 牧野貞通が常陸国笠間（茨城県笠間市）へ、笠間の井上氏は陸奥国磐城平（福島県いわき市）へ、磐城平の内藤政樹は延岡藩（70000石）へ移封する三方所替えが行われた |
| 1750 | 寛延３ | ８月 | 石垣築直堀浚願いを提出 |
| 1768 | 明和５ | ２月 | 内藤政陽が城内本小路に学寮、武寮を創設した。山本与兵衛を監督、白瀬道順を講師、佐久間左膳を儒学執行に任じた |
| 1769 | 明和６ | ７～８月 | 地震及び大雨によって石垣、土塀など多数破損。　御本城内　長坂御門屋根崩落、同所高石垣南之方角石折廻二間高サ二間半崩、御太鼓矢倉登坂左右石垣北ノ方高八尺ニ三間南之方角折廻九尺ニ三間崩、同所南之方御土蔵上通石垣高サ二間ニ五間崩、同所北ノ方石垣弐カ所高サ一間ニ四間半崩土手五間ニ七間程崩、二階御櫓石垣もめ申候、塀屋根瓦壁等大方損申候、　西御丸内、向御番所取附塀十二間崩但六尺船間ニ〆、同所塀下石垣三間半崩、同所南表塀十八間五尺崩、同所裏御門御番所下土手五間崩但古崩れ共、同所御門取附塀西之方九間半潰、同所新御殿東通中之口迄塀十七間崩、同所本〆方役所縁下石垣二間程崩、同所唐之間北之方石垣二間余崩、同所東表塀武者御門迄十九間一尺半潰、同所塀下石垣十九間半高サ四間ノ内二間半ニ二間崩残之分孕出、同所向御番所下石垣押出、同所坂下御門外腰懸ケ下石垣六間半崩腰掛ケ共破損、同所御門北之方塀折廻三間半崩、御馬屋向丸山土手石垣二カ所〆十三間崩、同所土手十一間崩、往来御長屋二カ所石垣九間ニ二間崩、同所御貸長屋石垣十四間崩、下御殿馬場入口大路次崩左右取付塀七間程半潰、 |
| 1770 | 明和７ | ２月 | 石垣修理願いを提出 |
| 1793 | 寛政５ | 11月 | 大火があり、博労町、元町、紺屋町の104軒焼失 |
| 1810 | 文化７ | ４月 | 伊能忠敬が測量のため延岡に来訪 |
| 1812 | 文化９ | ６月 | 伊能忠敬が測量のため延岡に来訪 |
| 1815 | 文化12 | １月 | 江戸藩邸に学問所として崇徳館を創立 |
| 1850 | 嘉永３ | ５月 | 学問所を広業館に改称 |
| 1852 | 嘉永５ | 10月 | 石垣修理願いを提出 |
| 1854 | 安政元 | 11月５日 | 豊後水道震源の地震発生。西曲輪石垣崩落し切通し通行不能。　御本城内　御三階櫓台土塀屋根瓦八間落、石御門倒れ、長坂御門棟瓦一間落、南御櫓石垣少々抜出、御渡櫓北之方壁少々損、　西御丸内　切通上土手石垣共高三間横四間崩、内土手二間石垣一間、中御門曲リ左右石垣崩、向番所大破、同断石垣南之方高四間横九間孕出、唐之間北之方石垣横十二間高四間孕出、坂下張番所御門外塀六間瓦損、同所北之方塀六間瓦損、向番所北之方塀六間大破、同所南ヨリ西江折廻御台所上等中御門迄塀二十五間大破、御徒番所曲リ、御玄関南土蔵壁大破、唐之間ヨリ御広間前迄十四間地割レ、下　御殿御土蔵壁大破、　御用所内　御土蔵三カ所共屋根并壁損其外所々損、　大部屋内　石垣北ヨリ西江折廻二十二間崩、塀四間倒レ二百間伏掛リ、本小路長屋西之方塀二間倒レ、同所北之方塀一間半伏掛リ、広業館塀二間伏掛リ、　三福寺内　尚徳院様　御墓損、孝献院様　右同断、転生院様　右同断、晴雲院様　右同断、玉垣不残損、のし立二間程倒レ、孝徳院様御門伏掛リ、石御燈籠不残倒、 |

第３表　延岡城関係年譜２

| 西　暦 | 和　暦 | 月日 | 事　　項 |
|---|---|---|---|
| 1857 | 安政４ | ４月 | 南町に医学所明道館を開設 |
| 1864 | 元治元 | ８月 | 第１次長州征討出兵 |
| 1866 | 慶応２ | ６月 | 第２次長州征討出兵 |
| 1868 | 明治元 | １月 | 延岡藩兵は、幕命により京都郊外野田口の防衛を担当 |
| 1868 | 明治元 | ４月 | 内藤政挙は朝廷より謹慎を命ぜられた |
| 1868 | 明治元 | ５月 | 内藤政挙は謹慎を解かれた |
| 1868 | 明治元 | ８月 | 内藤政挙が延岡に戻った |
| 1869 | 明治２ | ２月 | 豊後国内の延岡領と日向国内20700石余りと日田県管轄36000石余りの交換を実施 |
| 1869 | 明治２ | ６月 | 版籍奉還により内藤政挙は延岡藩知事に任命 |
| 1869 | 明治２ | ７月 | 廃藩置県により延岡県が置かれ、内藤政挙は藩知事を免職され、東京府貴属となり９月に上京 |
| 1870 | 明治３ | ９月 | 中町照源寺を廃して妙専寺に、中町誓敬寺を廃して南町小林山光勝寺に合寺した。また、中町本誓寺を廃して三福寺に合寺 |
| 1871 | 明治４ | 11月 | 延岡県が廃止され美々津県設置 |
| 1871 | 明治４ | ６月 | 延岡藩史に「藩城ヲ廃シ薬園トナス」の記録あり |
| 1872 | 明治５ | 11月 | 広業館廃止 |
| 1873 | 明治６ | １月 | 美々津県が廃止され宮崎県設置 |
| 1873 | 明治６ | １月 | 延岡社学（現岡富中学校敷地）設立 |
| 1875 | 明治８ | １月 | 延岡社学は亮天社に改称 |
| 1876 | 明治９ | ４月 | 小林乾一郎の提唱により亮天社の一部に女児教舎設立 |
| 1876 | 明治９ | ８月 | 宮崎県は鹿児島県に併合 |
| 1877 | 明治10 | ２月 | 西南戦争が起こり延岡隊は薩摩軍に参加 |
| 1877 | 明治10 | ８月 | 西南戦争に伴う「和田越の決戦」があり延岡は陥落、延岡城の太鼓櫓焼失 |
| 1878 | 明治11 | ２月 | 女児教舎は岡松甕谷邸跡地（現カルチャープラザのべおかの一部）に移転 |
| 1878 | 明治11 | 不詳 | 城山公園太鼓櫓跡に今山八幡宮より梵鐘を移設 |
| 1882 | 明治15 | １月 | 川中地区で大火があり、南町、船倉町、中町、北町の474戸が焼失 |
| 1883 | 明治16 | ５月 | 宮崎県再配置 |
| 1883 | 明治16 | ９月 | 洪水が起き、板田橋流失 |
| 1886 | 明治19 | ９月 | 洪水が起き、大瀬橋などが流失 |
| 1887 | 明治20 | ８月 | 洪水が起き、桜橋、専念寺橋、南町橋、新町橋などは流失し、大瀬橋は大破 |
| 1890 | 明治23 | ７月 | 板田橋、大瀬橋の改修 |
| 1890 | 明治23 | ８月 | 内藤政挙は東京より戻り、旧図書館付近（内藤松蔵宅・内藤政義末子で内藤の下御殿？とも呼ばれた）に居住 |
| 1890 | 明治23 | 不詳 | 亮天社・女児教舎は内藤家に経営移管 |
| 1892 | 明治25 | ２月 | 内藤政挙は、西ノ丸に建設された御殿に引越 |
| 1893 | 明治26 | ４月 | 旧延岡営林署跡に、前身の鹿児島大林区署延岡小林区署を開設 |
| 1901 | 明治34 | ４月 | 女児教舎を廃止し、私立延岡女学校開校 |
| 1903 | 明治36 | ４月 | 亮天社を廃止し、跡地に私立延岡女学校移転 |
| 1906 | 明治39 | ４月 | 私立延岡女学校は私立延岡高等女学校に改称 |
| 1915 | 大正４ | ２月 | 私立延岡高等女学校（現岡富中学校敷地）のカラミレンガ塀が造られた |
| 1920 | 大正９ | 不詳 | 誓敬寺が新小路に移転 |
| 1924 | 大正13 | ８月 | 大雨により大瀬橋流失 |
| 1925 | 大正14 | ６月 | 内藤家の投資により鉄橋の亀井橋開通 |
| 1928 | 昭和３ | 12月頃 | 須崎地区の埋め立て完成後、延岡架橋組合によって一銭橋（須崎橋）、二銭橋（五ヶ瀬橋）の有料橋を架けた |
| 1929 | 昭和４ | ４月 | 私立延岡高等女学校は県立延岡高等女学校として移管 |
| 1934 | 昭和９ | ３月 | 無料の須崎橋・板田橋開通 |
| 1934 | 昭和９ | ４月 | 内藤家より城山公園の寄贈 |
| 1935 | 昭和10 | 11月 | 現板田橋開通 |
| 1935 | 昭和10 | ９月頃 | 昭和天皇の行幸に備え、城山公園整備実施 |
| 1937 | 昭和12 | ７月 | 現安賀多橋開通 |
| 1938 | 昭和13 | ３月 | 県立延岡高等女学校寄宿舎建設のため、現水道局用地を取得 |

第４表　延岡城関係年譜３

| 西　暦 | 和　暦 | 月日 | 事　　項 |
|---|---|---|---|
| 1939 | 昭和14 | 10月 | 大雨により大瀬橋流失、須崎橋半壊 |
| 1939 | 昭和14 | 8月 | 内藤家より西ノ丸の寄贈を受け、内藤記念館として公開 |
| 1940 | 昭和15 | 8月 | 県立延岡高等女学校の寄宿舎完成 |
| 1942 | 昭和17 | 3月 | 内藤家より城山公園北側を青年学校用地として寄贈 |
| 1943 | 昭和18 | 9月 | 洪水のため須崎橋被害 |
| 1945 | 昭和20 | 6.29 | 延岡大空襲により大瀬橋・五ヶ瀬橋を含む市街地の多くが罹災し、現水道局にあった寄宿舎も焼失。<br>延岡城関連では西ノ丸の御殿・亀井神社が焼失 |
| 1945 | 昭和20 | 不詳 | 須崎橋・亀井橋の鉄骨は軍用に供出された |
| 1946 | 昭和21 | 3月 | 西ノ丸旧内藤記念館跡にNHKが中継放送所を開設 |
| 1947 | 昭和22 | 4月 | 延岡小学校がカルチャープラザのべおか付近に開校 |
| 1947 | 昭和22 | 4月 | 罹災した県立延岡高等女学校の寄宿舎及び校舎の復旧工事完成 |
| 1948 | 昭和23 | 4月 | 学制改革により県立延岡高等女学校を廃し、県立岡富高等学校設置 |
| 1948 | 昭和23 | 6月 | 大瀬橋（木橋）完成 |
| 1949 | 昭和24 | 4月 | 県立高等学校の通学区域制実施に伴い、県立岡富高等学校を廃し、県立延岡恒富高等学校に統合。<br>施設等は延岡市立岡富中学校に引き継がれた |
| 1950 | 昭和25 | 1月 | 旧五ヶ瀬橋開通 |
| 1950 | 昭和25 | 4月 | 延岡税務署が現延岡市健康管理センターへ移転・新築 |
| 1950 | 昭和25 | 5月 | キジア台風により大瀬橋流失 |
| 1951 | 昭和26 | 7月 | 城山公園に児童遊園地整備 |
| 1953 | 昭和28 | 4月 | この頃、現水道局敷地に市上下水道建設事務所（後の水道課）が設置された |
| 1953 | 昭和28 | 4月 | 旧須崎橋開通 |
| 1953 | 昭和28 | 5月 | 旧大瀬橋開通 |
| 1955 | 昭和30 | 8月 | 市制20周年記念事業として、（株）旭化成より野口記念館寄贈 |
| 1961 | 昭和36 | 4月 | 西ノ丸の一角に延岡測候所開設 |
| 1962 | 昭和37 | 3月 | NHK中継放送所が出北町へ移転 |
| 1963 | 昭和38 | 10月 | 市制施行30周年記念事業として、西ノ丸のNHK中継放送所跡に市民会館内藤記念館建設 |
| 1963 | 昭和38 | 2月 | 城山公園の時報鐘を新鋳、初代の梵鐘は内藤記念館に移転することとなった |
| 1963 | 昭和38 | 3月 | 現亀井橋開通 |
| 1964 | 昭和39 | 11月 | 市制30周年記念事業として、（株）旭化成より市立図書館の寄贈を受け翌年1月開館 |
| 1965 | 昭和40 | 7月 | 現須崎橋開通 |
| 1970 | 昭和45 | 4月 | 水道局集中管理棟完成 |
| 1974 | 昭和49 | 4月 | 延岡小学校がカルチャープラザのべおか付近から現在地に移転。 |
| 1977 | 昭和52 | 10月 | 延岡市社会教育センター完成 |
| 1980 | 昭和55 | 3月 | 現水道局本館完成 |
| 1983 | 昭和58 | 12月 | 水道局集中管理棟増築 |
| 1988 | 昭和63 | 4月 | 都市景観形成モデル事業にかかる城山公園整備スタート |
| 1993 | 平成5 | 3月 | 城山公園に北大手門（枡形門）整備 |
| 1993 | 平成5 | 3月 | 現五ヶ瀬橋開通 |
| 1997 | 平成9 | 2月 | カルチャープラザのべおか（現市立図書館）開館 |
| 1997 | 平成9 | 3月 | 延岡城跡保存整備基本計画策定 |
| 1997 | 平成9 | 4月 | 本小路通線改良事業スタート |
| 1998 | 平成10 | 3月 | 延岡城跡を市史跡に指定 |
| 2000 | 平成12 | 3月 | 延岡測候所無人計測化 |
| 2001 | 平成13 | 3月 | 延岡測候所建屋撤去及び自動観測機器設置 |
| 2001 | 平成13 | 3月 | 水道局集中管理棟撤去 |
| 2001 | 平成13 | 7月 | 宮崎北部森林管理署延岡事務所（旧延岡営林署）閉鎖 |
| 2001 | 平成13 | 3月 | 水道局発電機室及び監視室完成 |
| 2002 | 平成14 | 3月 | 大瀬橋架け替えのため仮橋開通 |
| 2003 | 平成15 | 3月 | 旧大瀬橋撤去 |
| | | | |
| | | | |

第5表　延岡城関係年譜4

# 第４章　調査の概要

## 第１節　絵図史料からの検討

現在確認されている絵図史料から調査地の検討を行った。

有馬時代に描かれた有馬家中屋敷付絵図（明治大学蔵）では武家屋敷（町原三之允 邸）が、牧野時代に描かれた日向延岡城絵図（茨城県笠間神社蔵）では、役所的な機能を果たしていた會所が描かれている。また、明治維新前後に描かれた延岡藩士族屋敷図（明治大学蔵）では、武芸を教えていた武寮が描かれている。

絵図から調査区付近は、藩の一つの中心的機能の役割を果たしていた地域と考えられる。

## 第２節　調査の方法と基本土層

調査区は、水道局の駐車場として利用されているため、日常業務に支障を与えないよう配慮する必要があった。そのため調査区は、来客者通路を確保し、建物予定地における必要最小限の範囲で実施した。発掘調査において廃棄土の置き場が問題となるが、確認調査の結果から調査区内の約1/2が旧水道局集中管理棟建設によって遺構の破壊を受けていたことから、調査区のアスファルト及び表土除去後、破壊地区に廃棄土を置くこととした。また、表土及び不要堆積土除去により生じる廃棄土は、事前に隣接する旧営林署跡地へ一時仮置きという措置をとった。

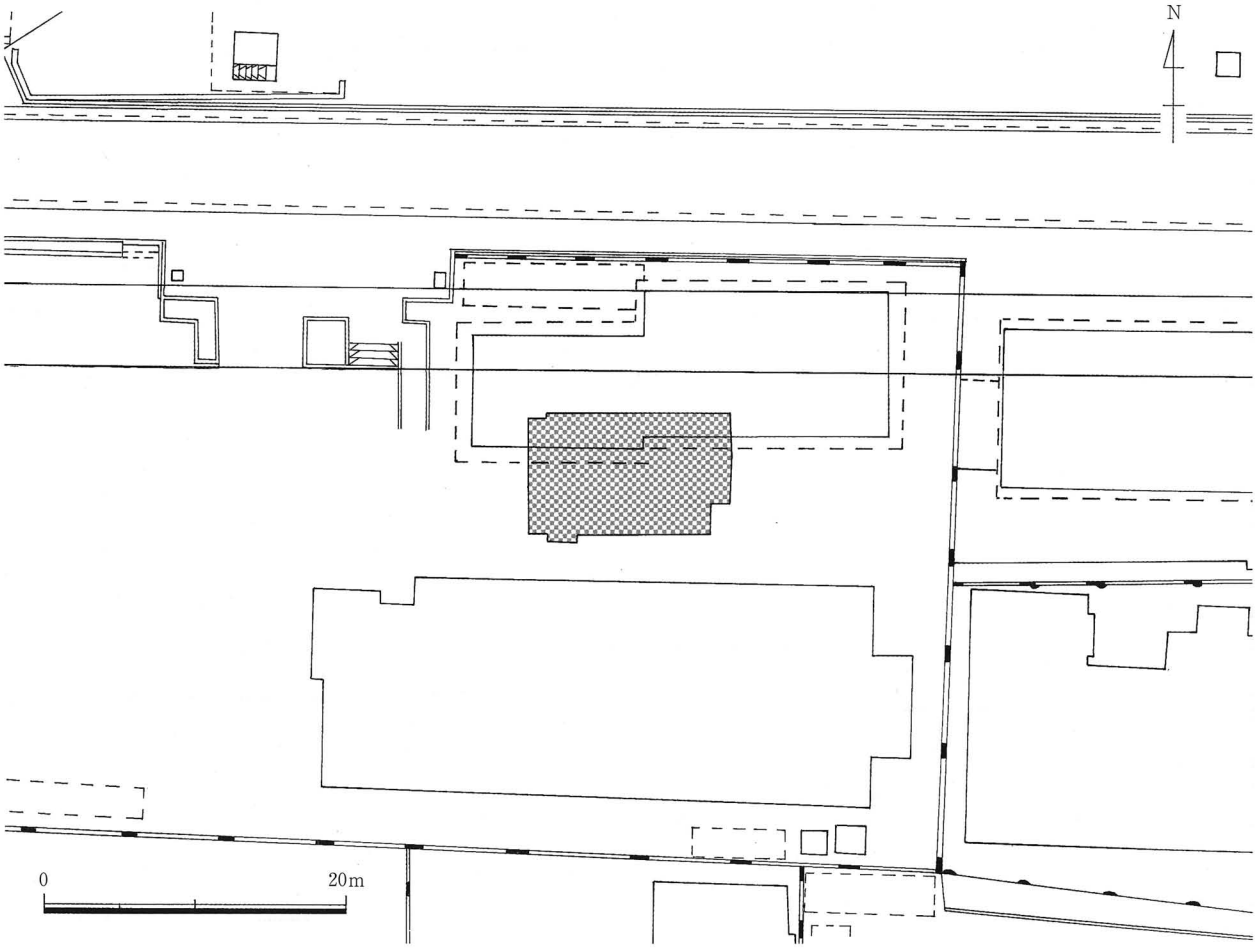



Fig. 4　調査区位置図（1/500）

発掘調査は、確認調査の結果を基に包含層上部（第５層）まで重機で除去し、その後、調査区内に１m×１mのグリッドを設定し、人力による掘り下げを実施した。掘り下げは、確認調査で柱穴を検出した第７層を第１遺構面として考え、面的に精査した後に随時記録し、１層ごとに下層へと掘り下げ精査・記録する方法を採用した。

調査区の基本土層は、確認調査のトレンチ土層図を基に、調査区南壁の土層を参考とした。本遺跡の基本層序は、柱穴内埋土を除外し概ね10層と判断した。

## 第３節　調査の概要

発掘調査は、確認調査で生じた廃棄土を旧営林署跡地に運搬し、その後確認調査のトレンチを拡張する形で調査区の確保を行った。調査は確認調査での成果を生かし、近代の盛土と考えられた上位５層を重機により除去し、第７層上面を第１遺構面として考えた。第６層より人力で掘り下げ、面的に精査を実施し、随時記録した後、下層へと掘り下げた。

調査の結果、第１遺構面では柱穴跡及び、何を目的としていたかは不明であるが、地形的に台形状の張り出し部を検出した。土層観察からも、第６層において堆積の厚薄を確認することができた。

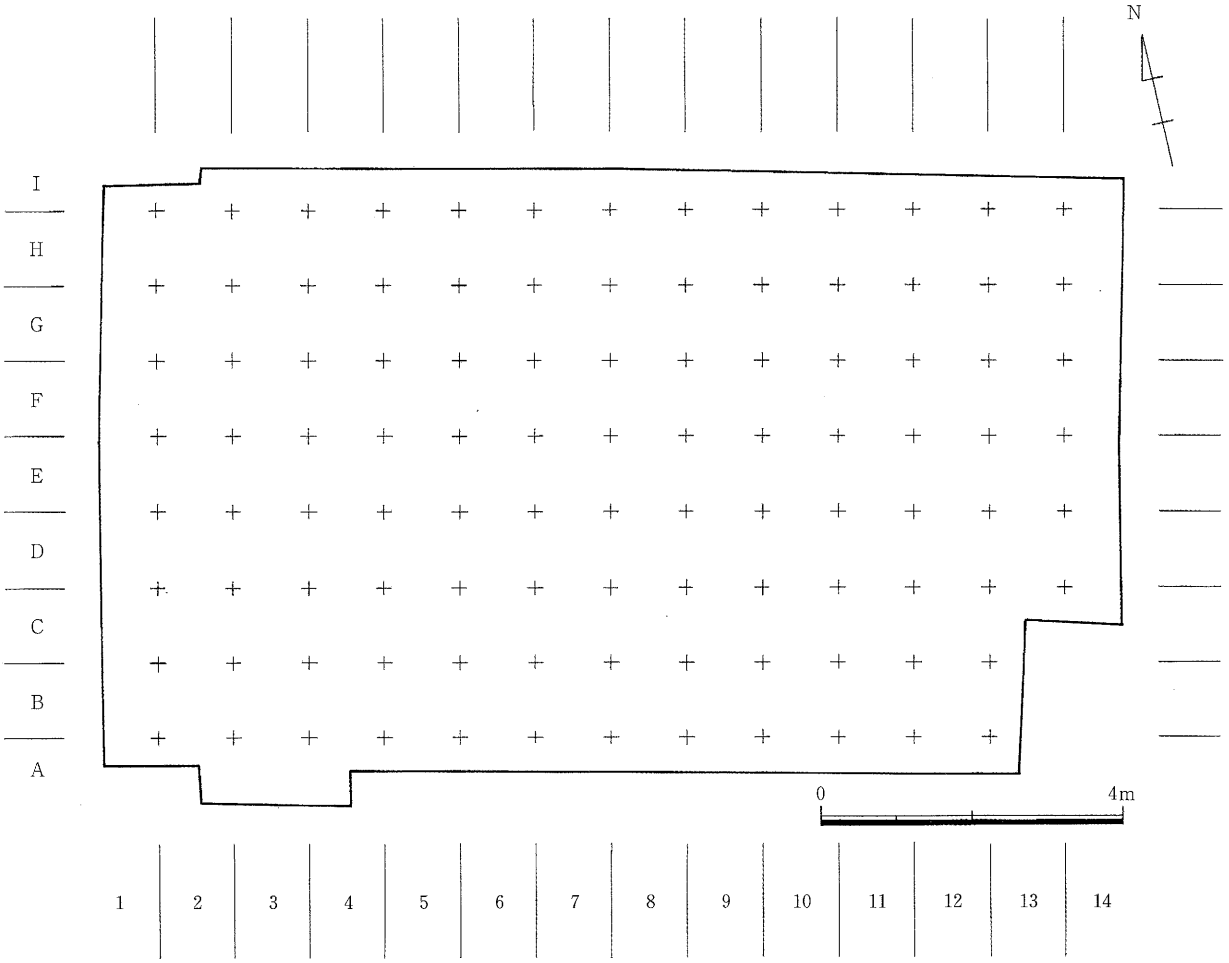



Fig. 5　グリッド配置図（1/100）

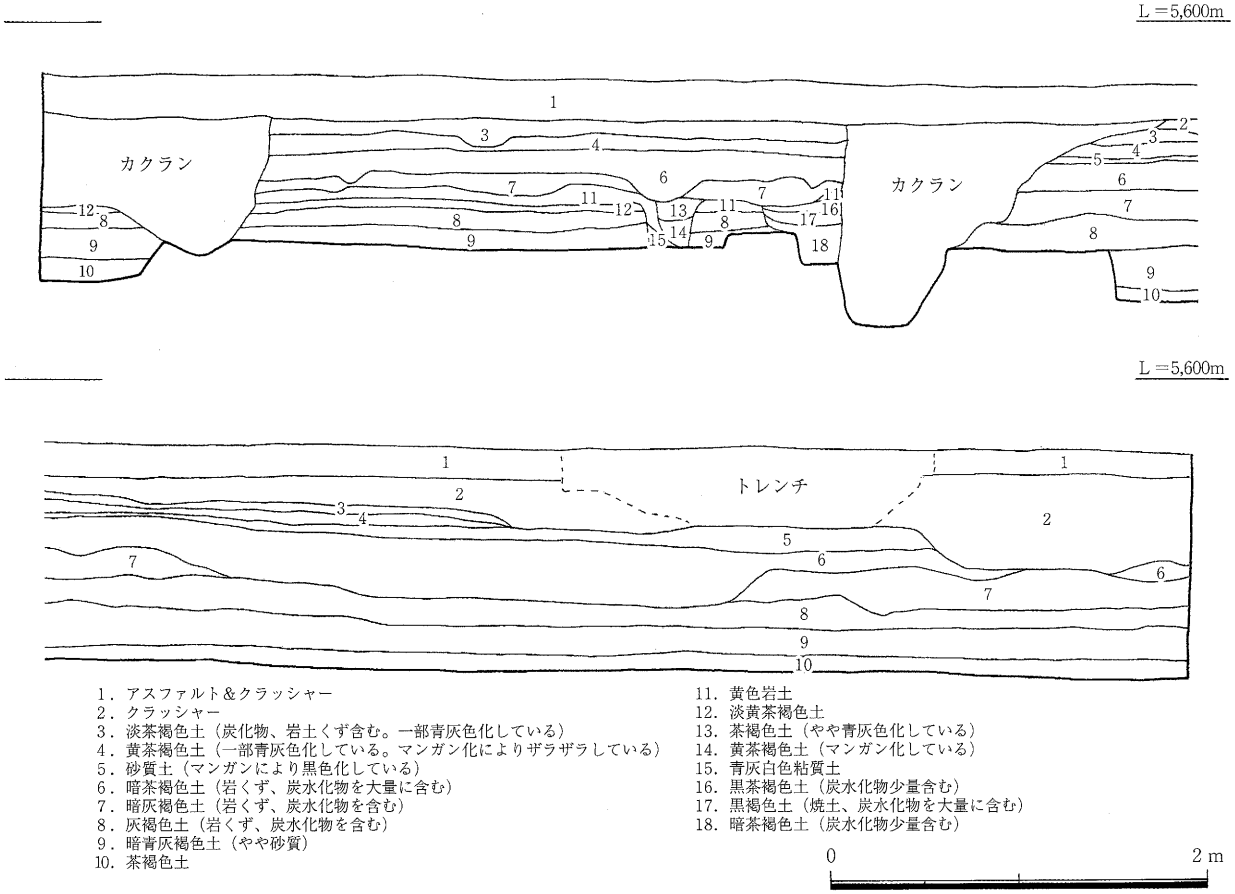



Fig. 6　南壁土層断面図（1/40）

出土遺物は、第６層内より出土する遺物を年代の参考としたが、瓦片、陶磁器片、土師器片、土製人形、古銭、砥石、鉄製品、須恵器片、土錘など様々な遺物が混在する状況であった。また、第６層内には大量の焼土、炭化物が含まれており、様々な遺物が混在する状況から併せて考えると、調査地付近において何らかの原因で大火が発生し、その廃棄土が調査地一帯に造成されたものではないかと考えられた。　続いて第２遺構面を検出するため、第７層を除去する作業を実施した。第２遺構面は、第８層上面と設定した。第８層は、井戸跡の検出面と合致する層にあたる。

調査の結果、精査により第１遺構面と同様に柱穴跡を検出した。また、焼土が集中して検出された焼土坑１基を検出した。またこの他に、井戸跡の南側に土坑を検出した。これは確認調査時に一部確認していたものであるが、調査を進めると土坑の下部にさらにもう一つの遺構を確認した。

精査の結果、その遺構は今回確認した井戸を構築する前の井戸跡であることが明らかとなった。調査では、この井戸跡の内部壁面に大きな抉りが見られ、構築中に何らかの理由で内部壁面が崩落したため、構築を中止したものと考えられた。井戸跡上部より検出した土坑からは、38枚を数える洪武通宝が出土した。このことから土坑は、祭祀土坑であると考えられた。これらの結果を総合して考えると、井戸を構築中に井戸壁面が崩落したため構築を中止し、埋土後に祭祀による供養（洪武通寶を埋設した土坑）を行い、その後に新しく井戸を構築したものと考えられた。このことから井戸跡周辺にはもう一時期古い井戸跡が存在していることが明らかとなった。

出土遺物は、第７層内より出土する遺物を年代の参考としたが、やはり第１遺構面同様に瓦片、陶磁器片、土師器片、鉄製品、須恵器片など様々な遺物が混在する状況であった。しかしながら、遺物量は全体的に少量であった。また各遺構から遺物が出土している。まず、焼土坑からは炭化物とともに土師器の皿が出土している。また井戸跡南側より検出した土坑からは、前述の通り38枚を数える洪武通寶が出土している。新しい井戸内からは、陶磁器片や瓦片、土錘等が出土している。古い井戸跡からは、遺物の出土は見られなかった。

引き続き第３遺構面を検出するため、第８層を除去する作業を実施した。第３遺構面は、第９層上面と設定した。第３遺構面は井戸跡周辺は掘り下げず、調査区中央で検出した配管による攪乱ラインより西側のみ掘り下げ実施した。その結果、この層上面でもこれまでと同様に柱穴跡を検出ることができた。

出土遺物はやはり少量で、陶磁器片、土師器片、鉄製品、古銭が出土した。下層に進むにつれ、遺物量は確実に減少していった。

最後に第10層上面まで掘り下げ、遺構検出を実施した。第９層より遺物の出土はあるものの、第10層上面での遺構の存在は認められなかった。

PL.２　南壁土層断面

# 第５章　調査の記録

## 第１節　第１文化層（７層上面）の検出遺構と遺物

（１）検出遺構

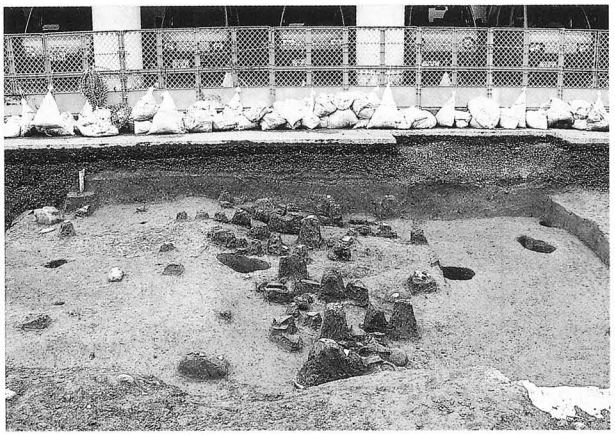
柱穴群

調査区Ａ～Ｄの１～11グリッド内で、大小19の柱穴を検出した。建物は掘建柱建物と考えられるが、建物の復元には至らない状況であった。

不明高壇部

調査区Ａ－３～Ｅ－３、Ａ－６～Ｄ－６から南に折れ曲がり、Ｅ－８へ向かう台形状を呈す不明な台形状の高壇部を検出した。Ａ－４、５～Ｅ－４、５は一段下がり溝状を呈していた。建物間の区割り的役割を果たすのもであろうか、現在のところは不明である。

PL.３　第１文化層遺構検出状況



PL.４　不明高壇部検出状況

（２）出土遺物

出土遺物は、６層に包含される遺物及び、柱穴内より出土した遺物がある。６層内からは瓦片、陶磁器片、土師器片、土製人形、古銭、砥石、鉄製品、須恵器片、土錘など様々な様相の計189点の遺物が混在する状況であった。柱穴からは、陶磁器片、土師器片、瓦片等の計13点の遺物が出土している。

１は柱穴７から、２～33は、６層内に包含されていた遺物である。

１～８は、土師器の小皿である。器壁の内外面にススが付着したものが見られることから、灯明皿として使用されていたと考えられる。９は、管状土錘である。外面は灰褐色を呈している。長さ5.3㎝、幅1.2㎝、径は0.3～0.4㎝、重量は7.5gを測る。10は、土製の犬と見られる。片耳と尾が欠損している。体長5.0㎝、体幅2.0㎝、体高は3.4㎝、重量25gを測る。淡黄白色を呈している。

11は、緑色岩製の砥石で欠損品と見られる。中心付近が研磨されており、薄くなっている。

12は、銅銭である。摩耗が著しいが、真書で「熙寧元寶」の文字が見れる。熙寧元寶は宋銭で、初鋳年が1068年とされる。

13～30は陶磁器で器種別に掲載した。13～15は碗と分類した。13は、17世紀の中国景徳鎮窯系の染付碗である。花文様が施されている。14は、時期不明の中国か初期伊万里のものとみられる。文様が施されているが不明である。15は、17～18世紀の瀬戸・美濃系の天目茶碗である。16～17は、微細な破片のため器種確定が不明であるが瓶と分類した。16は、美濃焼と見られ内外面に長石釉を施す。内

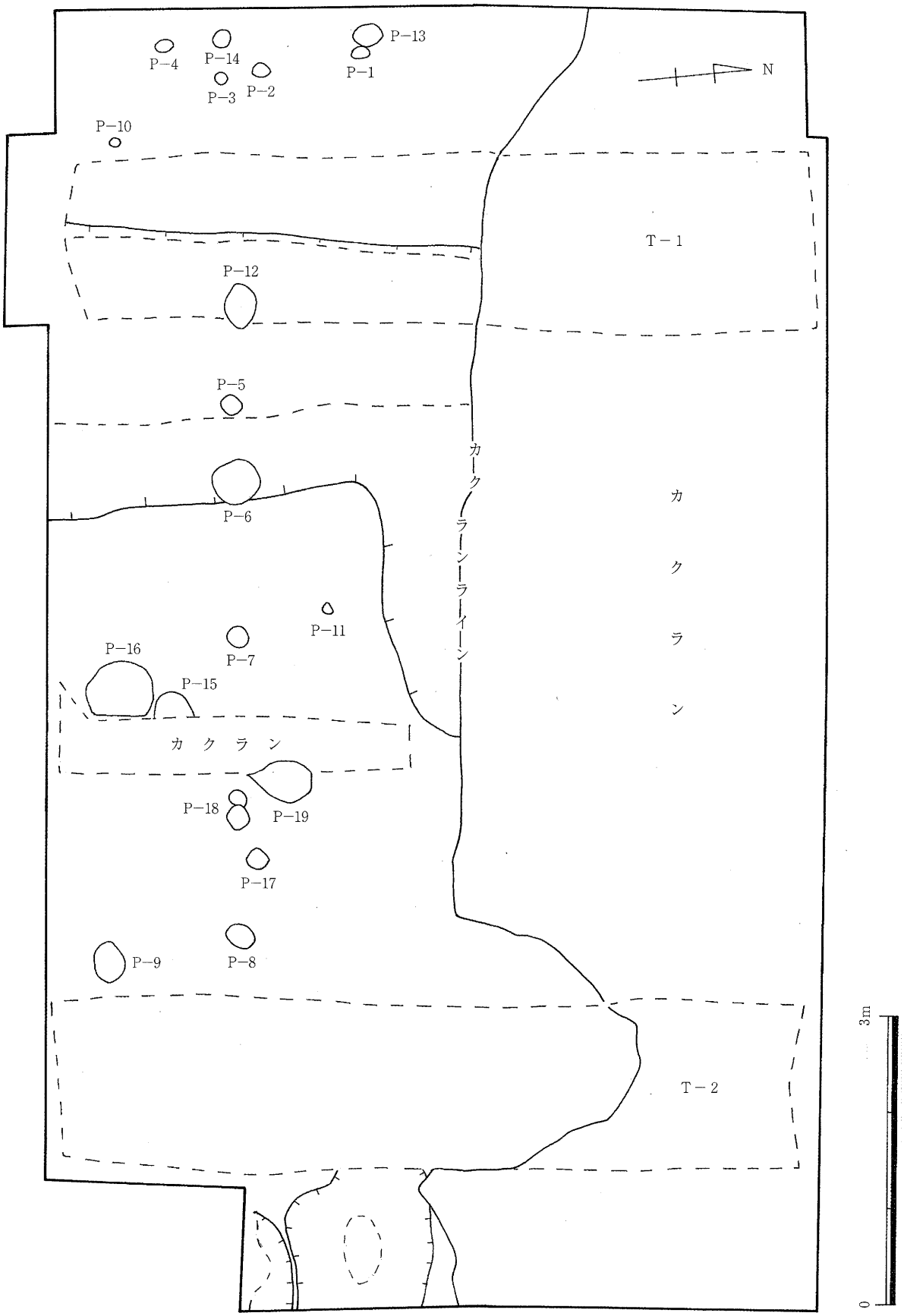



Fig. 7　第１文化層構造分布図（1/60）

面器壁に調整痕か型押し痕が見られる。17は白磁の口縁部である。時期・産地不明である。18～24は皿と分類した。18は、16～17世紀の中国景徳鎮窯系の染付皿である。高台外削りで、高台内に砂が付着する。見込みに文様が施されている。19は、16世紀とみられる中国の染付皿である。20は、陶器の皿で、時期は不明であるが関西系のものと見られる。口縁部にススが付着している。内外面に施釉が施され、貫入が見られる。21は、16～17世紀の中国景徳鎮窯系の染付皿である。見込みに如意頭文を施す。畳付けは釉剥ぎとなっている。22は、時期不明であるが中国景徳鎮窯系の染付皿である。内外面に文様が施されるが不明である。また、外面には鎬文様が施される。畳付けは釉剥ぎとなっている。焼成不良か、釉薬内に気泡が見られる。23、24は、17世紀後半の唐津の陶器皿である。内外面に灰釉が施され、貫入が見られる。25は、陶器の鉢と見られる。時期・産地不明である。内外面に施釉が施されている。底部に砂目が見られる。26は、15～16世紀の中国龍泉窯系の青磁盤と見られる。高台内蛇ノ目釉剥ぎとなっている。27～29は擂鉢である。27は、17～18世紀の備前のものと見られる。28は、17世紀後半の唐津のものである。口縁部に施釉が施される。29は、在地か関西系のものと見られる。時期は不明である。30は、時期・産地不明の陶器の片口である。施釉が施される。口縁部に重ね焼きをした目跡が残る。

31～34は瓦である。31、32は軒丸瓦で体部が欠損している。31は、瓦当径13.2cmを測る。左巻きの巴文で、巴文の周囲に圏線は巡らず、その外区に13個の珠文を配する。瓦当裏面の体部との接続部は、円に沿ってナデを施している。体部の凸面は、長軸方向にミガキが施されている。また、凹面は粗い布目痕を残している。32は、瓦当径14.2cmを測る。左巻きの巴文で、巴文の周囲に圏線は巡らず、その外区に13個の珠文を配する。瓦当裏面の体部との接続部は、円に沿ってナデを施している。体部の凸面は、長軸方向にミガキが施されている。また、凹面は欠損により不明である。33、34は鬼瓦の破片である。同一個体であろうか、表面に櫛目文が施されている。34には、「天上」の印刻が施されている。

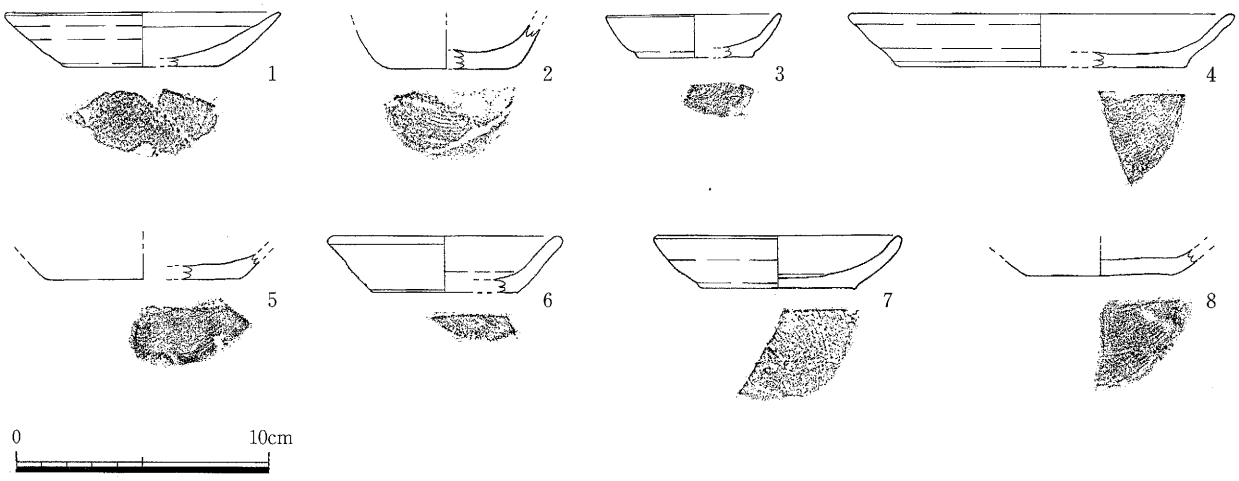



Fig. 8　第１文化層検出時出土遺物実測図１（1/3）

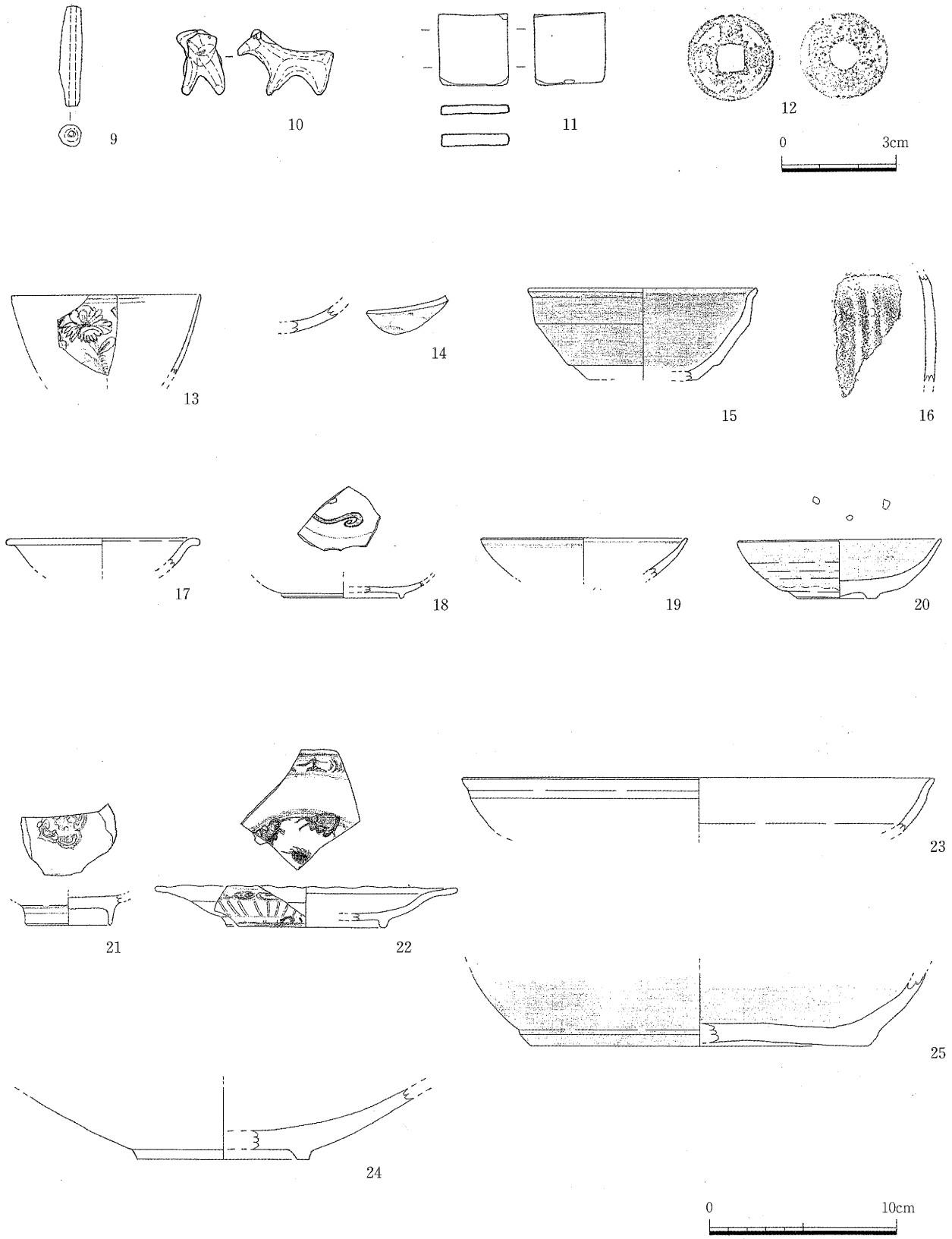



Fig. 9　第１文化層検出時出土遺物実測図２（９～11，13～25＝1/3，12＝2/3）

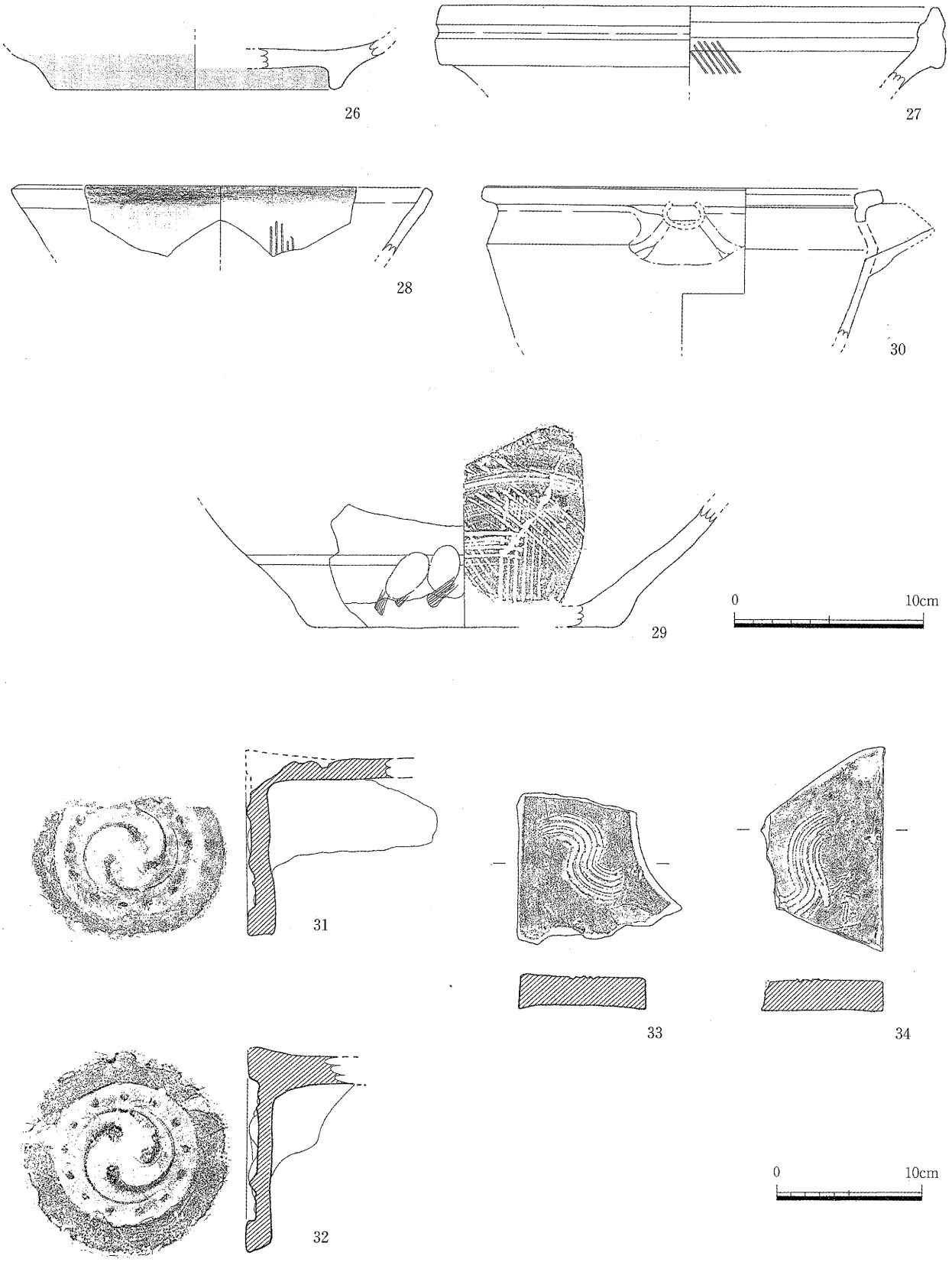


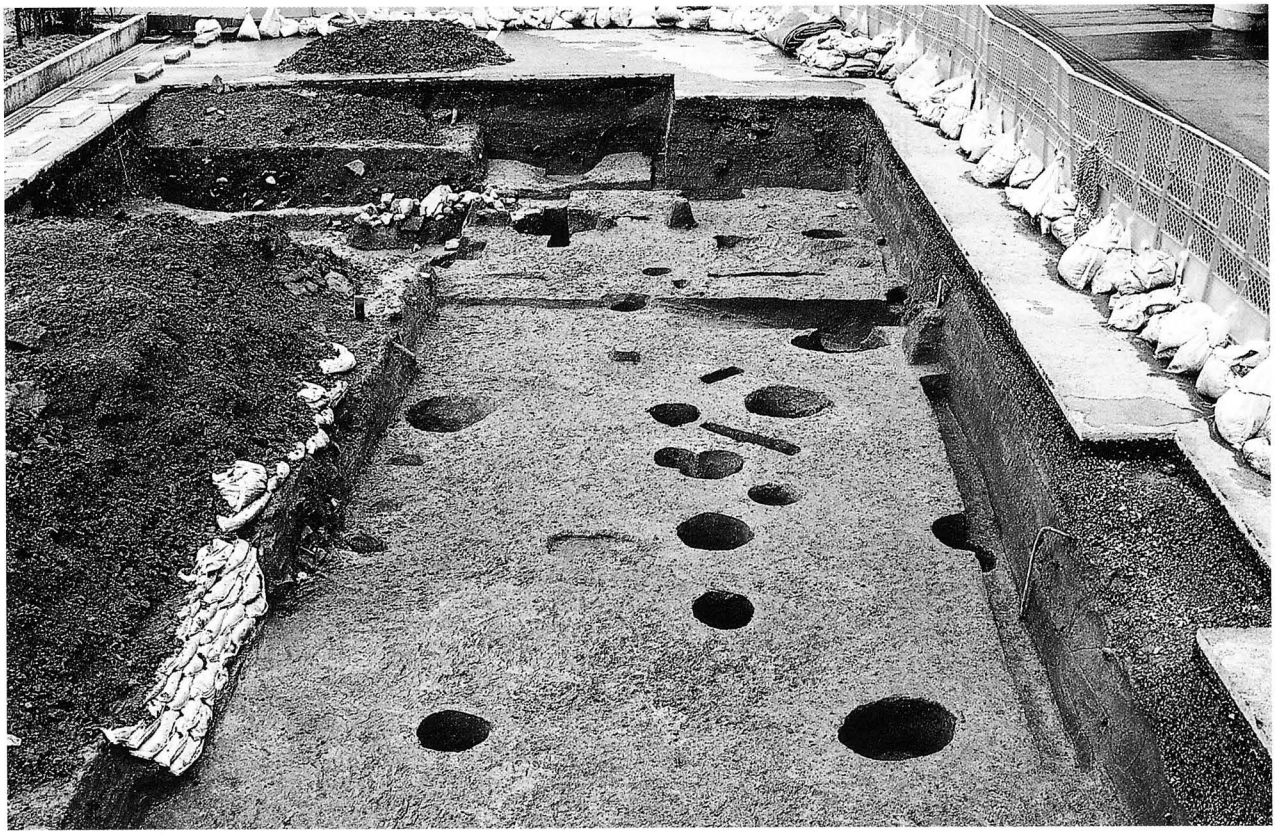

Fig.10　第１文化層検出時出土遺物実測図３（26～30＝1/3，31～34＝1/4）

## 第２節　第２文化層（８層上面）の検出遺構と遺物

### （１）検出遺構

柱穴群

調査区Ａ～Ｄの１～７グリッド内で、大小５の柱穴を検出した。建物は掘建柱建物と考えられるが、建物の復元には至らない状況であった。



PL.５　第２文化層遺構検出状況

焼土坑

調査区Ｂ－10グリッドで、南西－北東を長軸とする焼土坑を検出した。焼土坑は長さ69㎝、幅41㎝、深さ５㎝を測り非常に浅い土坑である。埋土中には、炭化物を大量に含んでおり、土師器片６点が出土した。廃棄土坑であろうか。

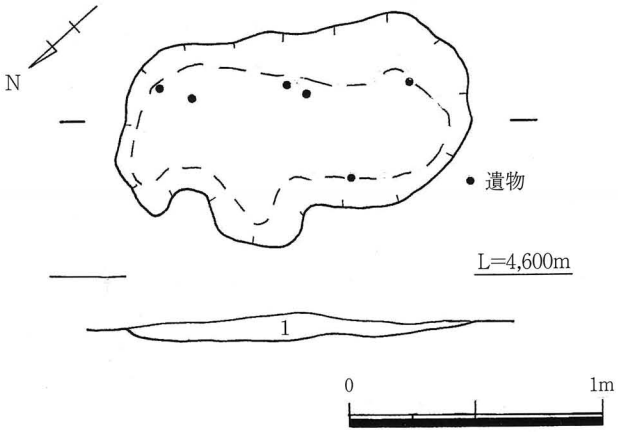



Fig.11　焼土坑実測図（1/30）

PL.６　焼土坑完掘状況

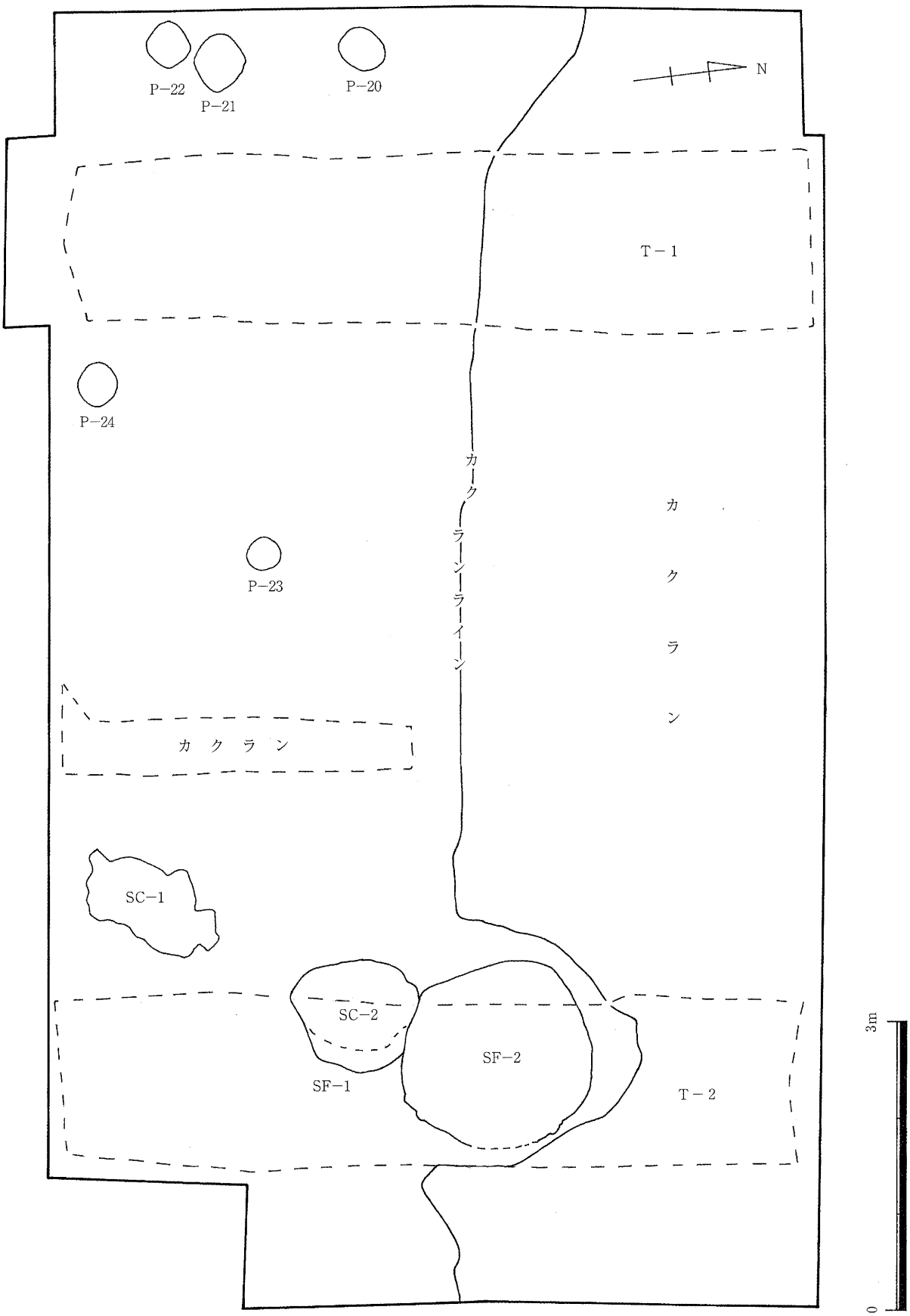



Fig.12　第２文化層遺構分布図（1/60）

井戸跡１

調査区Ｄ－11を中心に検出された。井戸跡検出面で、祭祀土坑及び井戸跡２と切り合っていたが、調査者の不手際と長雨による悪事により、土層断面が崩落し詳細が些か不明な状況となってしまった。井戸跡は素堀の構造で、検出面で1.16m×0.95m、深さ1.05mのやや楕円形を呈していた。しかし、底部では四方が方形を呈する形であった。井戸跡の東壁が抉られた状況で検出されたことから、壁面崩落により井戸構築を中止したものと考えられた。調査では、抉られた部分に堆積した土砂が流れ落ち、危険な状況となったため完掘できない状況となった。出土遺物は検出されなかった。

祭祀土坑

調査区のＤ－11、井戸跡１と切り合う形で検出された。土坑は検出面で1.36m×0.95m、深さ44㎝の楕円形を呈していた。土坑埋土中より38枚の洪武通寶が出土している。井戸跡１の状況や土坑の位置を考えると、井戸跡１構築の中止を祀った、祭祀的な意味合いを持つ遺構であると考えられる。

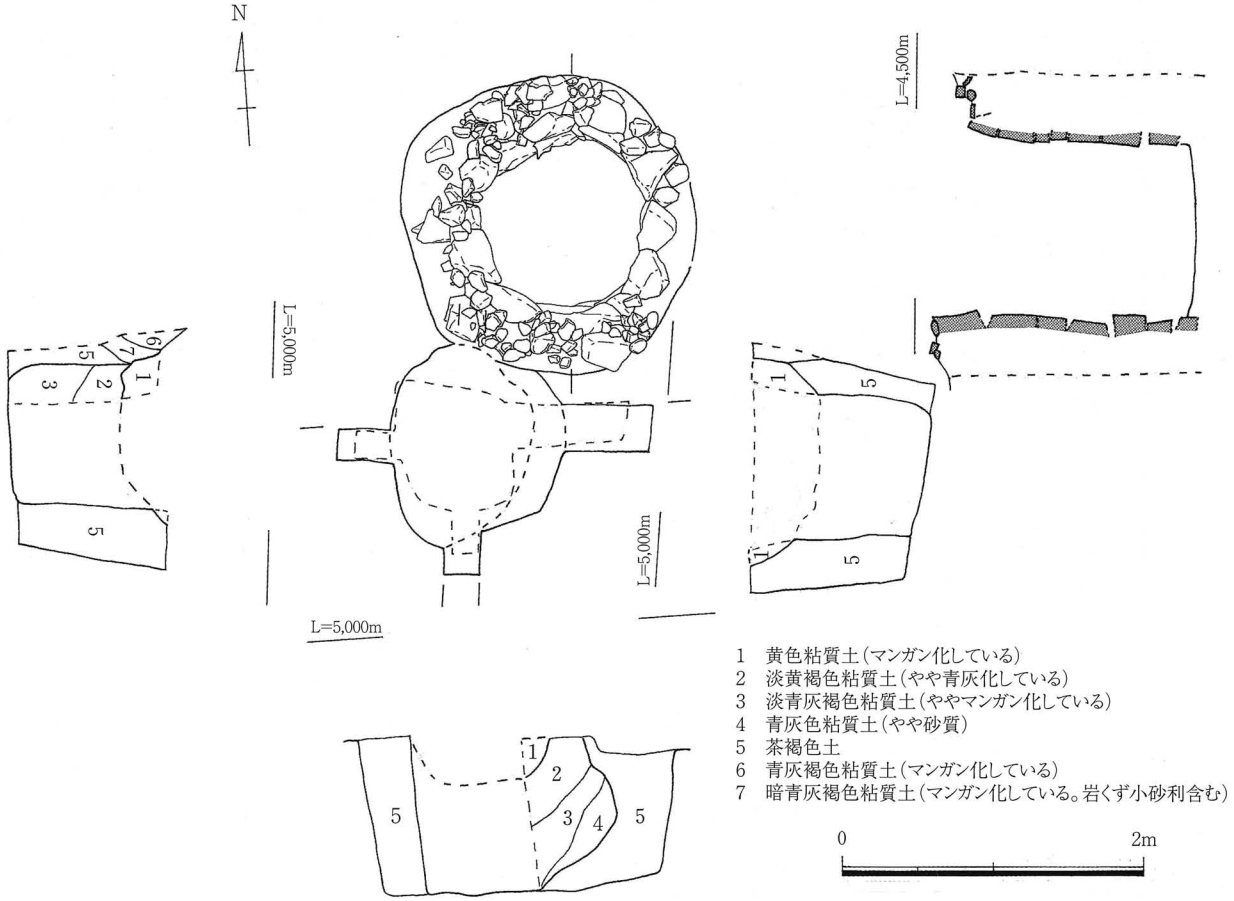



Fig.13　祭祀土坑・井戸跡１・２実測図（1/50）

井戸跡２

調査区のＥ、Ｆ－11、12を中心に検出された。確認調査の時点ですでに検出していたものである。井戸跡は、最大で内径1.15m×1.0mのやや楕円形を呈す。深さは1.75mまで掘り下げたが、長雨により地盤が緩み危険な状況であったため、底部完掘には至らなかった。井戸跡は、主に約20～40㎝の花崗斑岩の角礫を用い組み上げられ、各石の間に拳大ほどの河原石を詰め込んだ構造になっていた。出土遺物は、瓦片、陶磁器片、土錘が出土している。

調査において旧水道局集中管理棟建設による攪乱部を検出したが、井戸跡２はあえて避けた形で掘削されており、このことを考えると昭和45年に集中管理棟が建設されるまで開口（使用）していたと考えられる。

PL.７　井戸跡１崩落壁面検出状況

（２）出土遺物

出土遺物は、７層に包含される遺物及び、各遺構より出土した遺物がある。７層内からは遺物量は少なく瓦片、陶磁器片、土師器片、鉄製品、瓦質土器片の計18点が出土している。また、柱穴からは瓦片、土師器片の計４点が、焼土坑からは６点の土師器片が出土している。井戸跡２内からは、陶磁器片、瓦片、鉄製品の計18点が出土している。

35～37は、焼土坑から出土した土師器の小皿である。器壁の内外面にススが付着したものが　見られるが、灯明皿として使用されていたためか廃棄の際の焼成かは不明である。

38～42は、井戸跡１を祀ったと考えられる祭祀土坑から出土した銅銭である。全部で38枚が出土したが、銅錆が激しい。正字で「洪武通寶」の文字が見れる。洪武通寶は明銭で、初鋳年が1368年とされる。

43～46は、井戸跡２埋土内より出土した陶磁器である。43は、16～17世紀の中国景徳鎮窯系の染付碗である。内面に唐草文、外面に草木文を施す。44は、15～16世紀の中国龍泉窯系の青磁の盤と見られる。花型打ちである。45は、時期は不明であるが備前の壷若しくは甕と見られる。内面にタタキ痕が残る。46は、17世紀後半の唐津の陶器皿である。内外面に灰釉が施され、貫入が見られる。

47～52は、７層内に包含されていた遺物である。47は、瓦質土器の蓋とみられる。外面に浅い沈線が巡る。内外面ともナデ調整である。48、49は、土師器の小皿である。48は器高がやや高い。器壁の内外面にススが付着したものが見られることから、灯明皿として使用されていたと考えられる。50は、14～15世紀の中国龍泉窯系の青磁碗である。画花文様を施す。51は、17～18世紀の瀬戸・美濃系の天目茶碗である。52は、瓦質土器の甕とみられる。内外面に多量のススが付着している。外面はナデ調整、内面はハケ目調整が施されている。

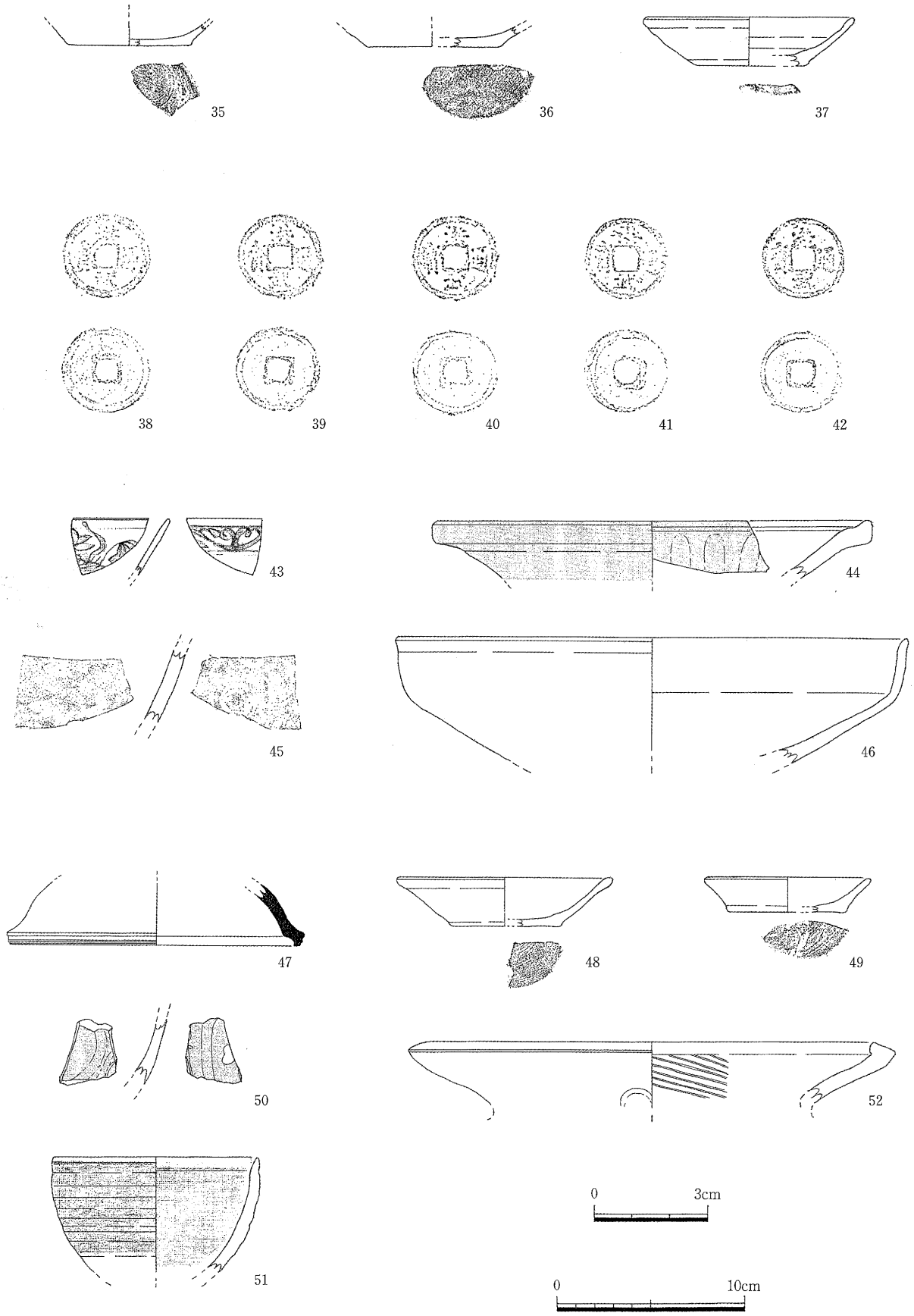



Fig.14　第２文化層検出時出土遺物実測図（35～37,43～52＝1/3，38～42＝2/3）

## 第３節　第３文化層（９層上面）の検出遺構と遺物

（１）検出遺構

柱穴群

調査区Ｂ～Ｅの２～７、Ｃ－11グリッド内で、大小９の柱穴を検出した。建物はこれまでと同様に掘建柱建物と考えられるが、建物の復元には至らない状況であった。

PL.８　第３文化層遺構検出状況

（２）出土遺物

出土遺物は、８層に包含される遺物及び、柱穴跡より出土した遺物がある。８層内からは上層と同様に遺物量は少なく陶磁器片、土師器片、鉄製品、古銭、瓦質土器の計25点が出土している。また、柱穴からは陶磁器片、土師器片、瓦片、土錘の計10点が出土している。

53、54は柱穴29、55は柱穴30から、56、57は、８層内に包含されていた遺物である。

53は、14～15世紀の中国景徳鎮窯系の青磁碗と見られる。内外面に印刻が施される。54は、陶器の大皿である。時期・産地は不明である。内外面に施釉されているが、風化か焼成不良か釉薬の状態が非常に汚い。55は、管状土錘である。全体的に灰褐色を呈す。長さ5.2cm、幅1.2cm、径1.2cm、重量は5.0gを測る。56は、白磁の皿である。時期は不明だが、中国のものと見られる。見込みに沈線が巡らされている。57は、14～15世紀の中国龍泉窯系の青磁の皿か碗である。高台無釉で、畳付きは斜めに削り出されている。見込みに線彫りの印刻が見られるが、文字か絵かは不明である。

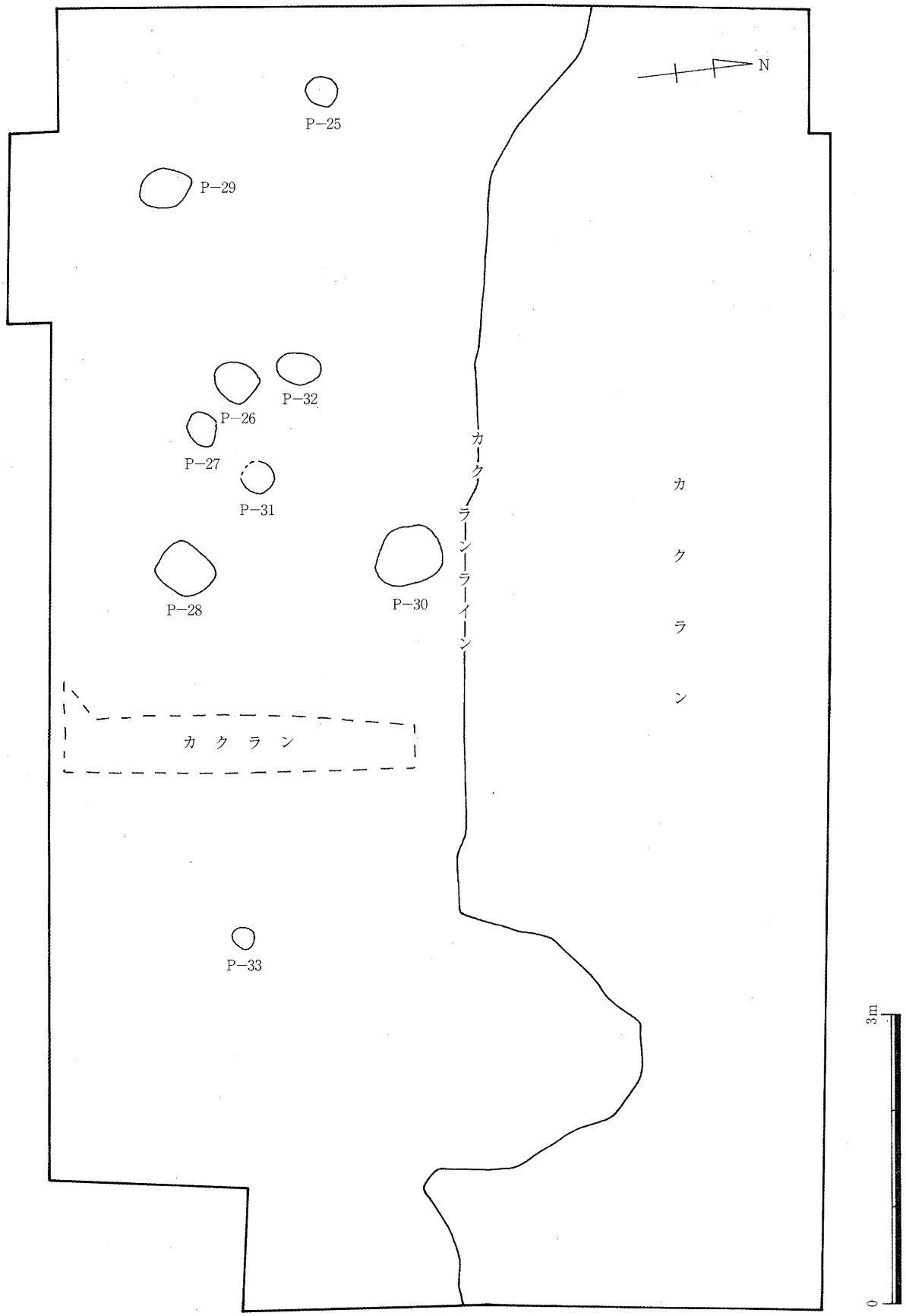



Fig.15　第３文化層遺構分布図（1/60）

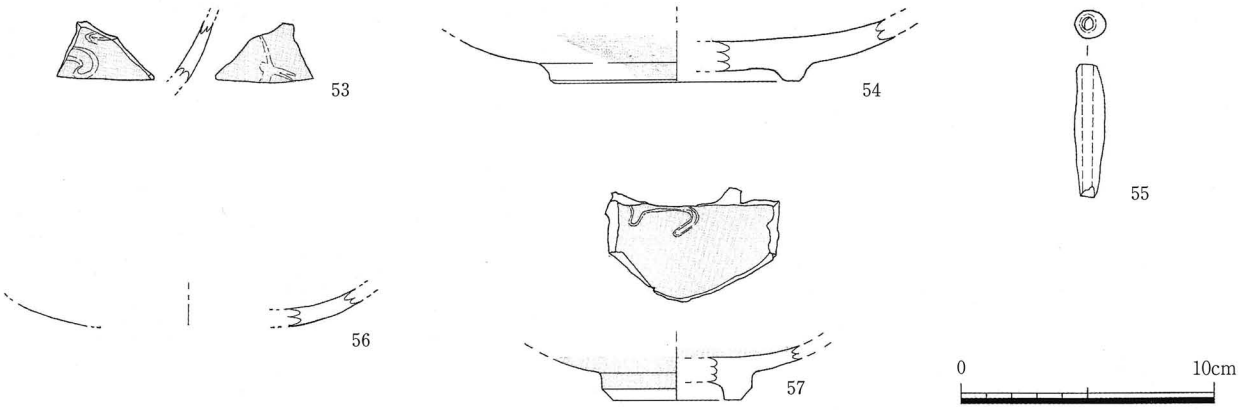



Fig.16　第３文化層検出時出土遺物実測図（1/3）

## 第４節　９層内の出土遺物

調査の課程において、10層上面の遺構検出を実施したが遺構の存在は確認できなかった。しかし、９層内に包含された遺物が若干あるので報告する。９層内からは、陶磁器片、土師器片、瓦片、瓦質土器、鉄製品、古銭の計30点が出土している。

58は、瓦質土器の鍋かハガマとみられる。在地のものであろうか。外面にススが付着する。外 面はヘラケズリとハケ目、内面はハケ目調整である。59も、瓦質土器で壷とみられる。やはり、在地のものであろうか。外面の肩部に格子状のタタキ痕が残る。内面は不定方向のハケ目調整である。60は、14～15世紀の中国龍泉窯系の鉢である。高台内は蛇ノ目釉剥ぎとなっている。高台内に砂が付着する。見込みには印刻が見られるが、文様は不明である。61は、刀子と見られる。錆が著しい。62は、改造鐚の銅銭である。方篆治平といわれる。改造鐚は、加刀して修正したものではなく、新規に母銭を制作して鋳造されたものとされている。室町時代後期から安土・桃山時代に、その多くは制作されたようである。書体は元福手で、文字は不明である。破損が著しい。

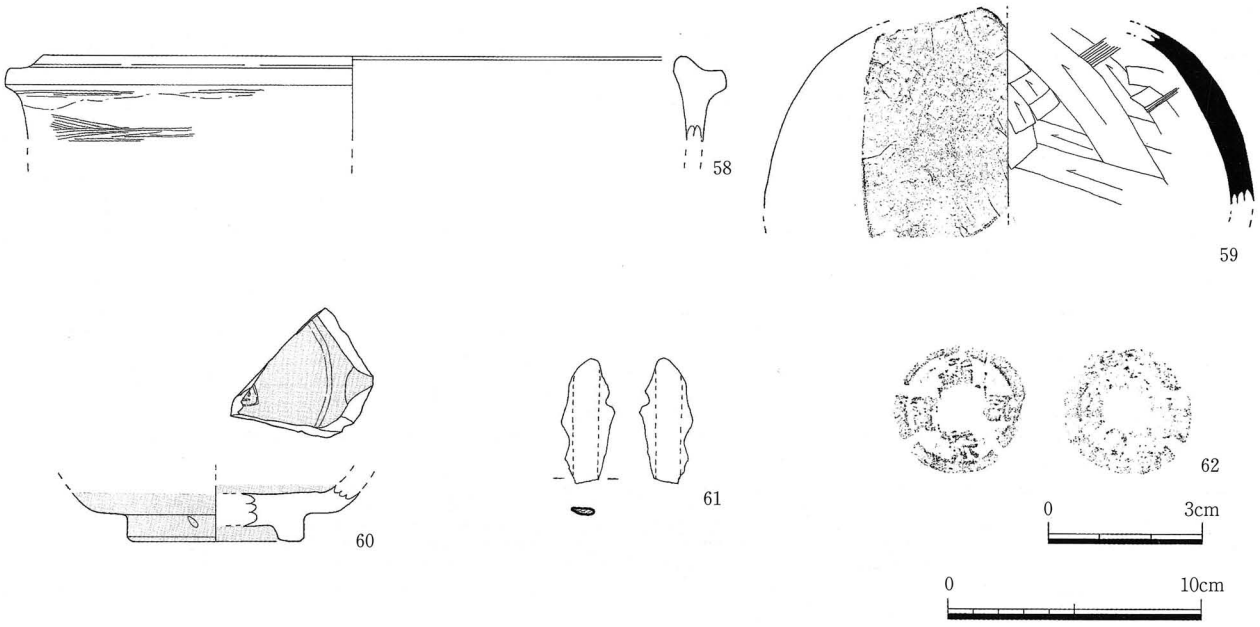



Fig.17　９層内出土遺物実測図（58～61＝1/3，62＝2/3）

| No | 出土地点 | 器種 | 法量 | | | 胎土 | 色調 | | 調整 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径・長(cm) | 底径・幅(cm) | 器高・厚(cm) | | 内面 | 外面 | 内面 | 外面 | |
| 1 | 柱穴7 | 皿 | 10.7 | 6.0 | 2.1 | 砂粒を含む | 赤茶褐色 | 赤茶褐色 | ナデ | ナデ | 底部糸切り痕。内外面スス付着 |
| 2 | 6層内 | 皿 | | 4.8 | | 砂粒を含む | 赤茶褐色 | 赤茶褐色 | ナデ | ナデ | 底部糸切り痕。内外面スス付着 |
| 3 | 6層内 | 皿 | 6.8 | 4.1 | 1.3 | 砂粒を含む | 淡黄茶褐色 | 淡赤茶褐色 | ナデ | ナデ | 底部糸切り痕 |
| 4 | 6層内 | 皿 | 15.0 | 11.4 | 2.1 | 砂粒を含む | 淡黄茶褐色 | 淡赤茶褐色 | ナデ | ナデ | 底部糸切り痕 |
| 5 | 6層内 | 皿 | | 7.2 | | わずかに砂粒を含む | 淡赤茶色 | 淡赤褐色 | ナデ | ナデ | 底部糸切り痕。内外面スス付着 |
| 6 | 6層内 | 皿 | 5.2 | 5.6 | 2.2 | わずかに砂粒を含む | 淡黄茶褐色 | 淡黄茶褐色 | ナデ | ナデ | 底部糸切り痕。内外面スス付着 |
| 7 | 6層内 | 皿 | 9.7 | 6.2 | 2.1 | 砂粒を含む | 淡赤茶褐色 | 淡黄茶褐色 | ナデ | ナデ | 底部糸切り痕。内外面スス付着 |
| 8 | 6層内 | 皿 | | 5.8 | | 砂粒を含む | 赤茶褐色 | 赤茶褐色 | ナデ | ナデ | 底部糸切り痕 |
| 9 | 6層内 | 土錘 | 0.3～0.4 | 5.3 | 1.2 | 砂粒を含む | | 灰褐色 | | | 重量7.5g |
| 10 | 6層内 | 土人形（犬） | 5.0 | 2.0 | 3.4 | わずかに砂粒を含む | | 淡黄白色 | ナデ | ナデ | 耳、尾欠損。重量25g |
| 35 | 焼土坑 | 皿 | | 6.4 | | 砂粒を含む | 淡黄褐色 | 淡褐色 | 不明 | ナデ | 底部糸切り痕。外面スス付着 |
| 36 | 焼土坑 | 皿 | | 6.8 | | 砂粒を含む | 淡赤茶褐色 | 赤茶褐色 | ナデ | ナデ | 底部糸切り痕。外面スス付着 |
| 37 | 焼土坑 | 皿 | 11.6 | 6.0 | 2.4 | 砂粒を含む | 淡黄褐色 | 淡黄褐色 | ナデ | ナデ | 底部糸切り痕。外面スス付着 |
| 47 | 7層内 | 蓋？ | | 15.0 | | 砂粒を含む | 灰白色 | 灰白色 | ナデ | ナデ | 瓦質土器。外面に沈線 |
| 48 | 7層内 | 皿 | 10.0 | 4.6 | 2.65 | 砂粒を含む | 赤茶褐色 | 赤茶褐色 | ナデ | ナデ | 底部糸切り痕。内外面スス付着 |
| 49 | 7層内 | 皿 | 7.6 | 5.0 | 1.6 | 砂粒を含む | 淡黄白色 | 淡黄白色 | ナデ | ナデ | 底部糸切り痕 |
| 52 | 7層内 | 甕 | 22.8 | | | 砂粒を含む | 褐色 | 灰褐色 | ハケ目 | ナデ | 瓦質土器。内外面に多量にスス付着 |
| 55 | 柱穴30 | 土錘 | 1.2 | 5.2 | 1.2 | 砂粒を含む | | 灰褐色 | | | 重量5.0g |
| 58 | 9層内 | 鍋？ハガマ？ | 24.0 | | | 砂粒を含む | 淡灰白色 | 淡褐色 | ハケ目 | ハケ目、ヘラケズリ | 瓦質土器 |
| 59 | 9層内 | 壷？ | | | | わずかに砂粒を含む | 淡灰白色 | 灰褐色 | ハケ目 | 格子状のタタキ | 瓦質土器 |

| No | 出土地点 | 銭貨名 | 国名 | 初鋳年 | 書体 | 口径（cm） | 厚さ（cm） | 重量（g） | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 12 | 6層内 | 熙寧元寶 | 宗か日本 | 1068年 | 真書 | 2.3 | 1.5 | 2.5 | |
| 38 | 祭祀土坑 | 洪武通寶 | 明か日本 | 1368年 | 正字 | 2.2 | 2.0 | 3.5 | 38枚出土の1枚 |
| 39 | 祭祀土坑 | 洪武通寶 | 明か日本 | 1368年 | 正字 | 2.2 | 1.5 | 2.7 | 38枚出土の1枚 |
| 40 | 祭祀土坑 | 洪武通寶 | 明か日本 | 1368年 | 正字 | 2.2 | 1.5 | 2.7 | 38枚出土の1枚 |
| 41 | 祭祀土坑 | 洪武通寶 | 明か日本 | 1368年 | 正字 | 2.1 | 1.5 | 2.7 | 38枚出土の1枚 |
| 42 | 祭祀土坑 | 洪武通寶 | 明か日本 | 1369年 | 正字 | 2.1 | 1.5 | 2.7 | 38枚出土の1枚 |
| 62 | 9層内 | 方篆治平 | 日本 | 室町後? | 元福手 | 2.4 | 0.1 | 0.8 | 改造錐 |

| No | 種別 | 器種 | 出土地点 | 法量 | | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 口径・長(cm) | 底径・幅(cm) | 器高・厚(cm) | 重量（g） | |
| 11 | 石製品 | 砥石 | 6層内 | 4.0 | 3.6 | 0.6 | 15.0 | 緑色岩製。欠損 |
| 61 | 鉄製品 | 刀子 | 9層内 | 4.8 | 1.0 | 0.2 | 12.5 | 錆が著しい |

第6表　出土遺物観察1（土器、銅銭、石、鉄製品）

| No | 種別 | 器種 | 出土地点 | 法量 | | | 形態及び文様 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 口径・長(cm) | 底径・幅(cm) | 器高・厚(cm) | | |
| 13 | 磁器 | 染付碗 | 6層内 | 10.0 | | | 染付花文様 | 17C、中国景徳鎮窯系 |
| 14 | 磁器 | 染付碗 | 6層内 | | | | 文様不明 | 時期不明、中国か初期伊万里 |
| 15 | 陶器 | 碗 | 6層内 | 11.8 | 5.6 | 4.8 | 天目茶碗 | 17～18C、瀬戸・美濃 |
| 16 | 磁器 | 瓶？ | 6層内 | | | | 長石釉 | 時期不明、美濃 |
| 17 | 白磁 | 瓶？ | 6層内 | 10.2 | | | | 不明 |
| 18 | 磁器 | 皿? | 6層内 | | 6.4 | | 高台外削り、高台内砂付着、見込み不明文様 | 16～17C、中国景徳鎮窯系 |
| 19 | 磁器 | 染付皿 | 6層内 | 10.8 | | | | 16C？、中国 |
| 20 | 陶器 | 皿 | 6層内 | 10.8 | 4.0 | 3.1 | 内外面施釉、貫入 | 時期不明、関西系 |
| 21 | 磁器 | 皿 | 6層内 | | 4.5 | | 見込み如意頭文、畳付け釉剥ぎ | 16～17C、中国景徳鎮窯系 |
| 22 | 磁器 | 染付皿 | 6層内 | | | | 外面鎬文様、畳付け釉剥ぎぎ | 時期不明、中国景徳鎮窯系 |
| 23 | 陶器 | 皿 | 6層内 | 24.6 | | | 貫入、内面及び外面の一部に灰釉ぎ | 17C後、唐津 |
| 24 | 陶器 | 皿 | 6層内 | | 8.8 | | 貫入、内面及び外面の一部に灰釉ぎ | 17C後、唐津 |
| 25 | 陶器 | 鉢？ | 6層内 | | 17.6 | | 底部に砂目有、内外面施釉ぎ | 不明 |
| 26 | 青磁 | 盤 | 6層内 | | 14.8 | | 高台内蛇の目釉剥ぎ | 15～16C、中国龍泉窯系 |
| 27 | 陶器 | 擂鉢 | 6層内 | 26.0 | | | | 17～18C、備前？ |
| 28 | 陶器 | 擂鉢 | 6層内 | 21.8 | | | | 17C後、唐津 |
| 29 | 陶器 | 擂鉢 | 6層内 | | 15.8 | | | 時期不明、関西か在地 |
| 30 | 陶器 | 片口 | 6層内 | 20.7 | | | 内外面鉄釉 | 不明 |
| 43 | 磁器 | 染付碗 | 井戸跡2 | 14.0 | | | 花木文、唐草文 | 16～17C、中国景徳鎮窯系 |
| 44 | 青磁 | 盤 | 井戸跡2 | 23.0 | | | 花型打ち | 15～16C、中国龍泉窯系 |
| 45 | 陶器 | 壷か甕 | 井戸跡2 | | | | 内面にタタキ痕 | 時期不明、備前？ |
| 46 | 陶器 | 皿 | 井戸跡2 | 22.6 | | | 内外面灰釉。貫入 | 17C後、唐津 |
| 50 | 青磁 | 碗 | 7層内 | | | | 画花文様 | 14～15C、中国龍泉窯系 |
| 51 | 陶器 | 碗 | 7層内 | 11.6 | | | 天目茶碗 | 17～18C、瀬戸・美濃系 |
| 53 | 青磁 | 碗 | 柱穴29 | | | | 内外面に印刻 | 14～15C、中国龍泉窯系 |
| 54 | 陶器 | 大皿 | 柱穴29 | | 9.4 | | 内外面に施釉 | 不明 |
| 56 | 白磁 | 皿 | 8層内 | | | | 見込みに沈線 | 時期不明、中国 |
| 57 | 青磁 | 皿か碗 | 8層内 | | 5.0 | | 高台無釉。畳付けを斜めに削り出す。見込みに線彫りの印刻 | 14～15C、中国龍泉窯系 |
| 60 | 青磁 | 鉢 | 9層内 | | 6.6 | | 高台内蛇ノ目釉剥ぎ。高台内に砂付着。見込みに刻印 | 14～15C、中国龍泉窯系 |

| No | 種類 | 出土地点 | 法量 | | | 調整 | | 胎土 | 焼成 | 色調 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 瓦当径(cm) | 体部長(cm) | 体部幅(cm) | 凹（裏）面 | 凸（表）面 | | | 凹面 | 凸面 | |
| 31 | 軒丸瓦 | 6層内 | 13.2 | 11.0 | 12.2 | 粗い布目痕 | 長軸方向にミガキ | 砂粒を含む | 良 | 暗灰褐色 | 暗灰褐色 | 左巻き巴文 |
| 32 | 軒丸瓦 | 6層内 | 14.2 | 6.5 | 13.2 | | 長軸方向にミガキ | 砂粒を含む | 良 | 暗灰褐色 | 暗灰褐色 | 左巻き巴文 |
| 33 | 鬼瓦 | 6層内 | | | | ミガキ | ミガキ | 砂粒を含む | 良 | 灰白色 | 灰白色 | |
| 34 | 鬼瓦 | 6層内 | | | | ミガキ | ミガキ | 砂粒を含む | 良 | 灰白色 | 灰白色 | 「天上」印刻 |

第7表　出土遺物観察表2（陶磁器、瓦物）

# 第6章　まとめ

絵図を見ると、描かれた時代によって異なるものの、武家屋敷や會所、武寮といった建物が描かれている。今回発掘調査された延岡城内遺跡は、旧水道局集中管理棟建設により調査区の約1/2が破壊を受けている状況であった。しかしながら、井戸跡の残存や、破壊区以外での土層堆積状況は比較的良好であったことは幸いであった。

今回の調査では、土層の堆積が良好であったことや各遺構の検出面を総合して観察し、3面にわたる遺構面を設定し調査を行った。まとめとして各層に包含された遺物を中心に、今回調査・記録した3面の遺構面について若干ではあるが考察を加えたいと思う。遺構面の考察については、基本的にその上層に包含される遺物を対象として考えた。

## 第1節　第1文化層（7層上面）の検証

調査では、大きさや深さが異なる柱穴群を検出した。柱穴はすべて掘建柱のものであった。今回の調査では、調査範囲が限られたため建物の復元には至らなかった。

また調査では、調査区中央付近で台形状の高壇部を検出した。この高壇部は調査区の南側へさらに延びていくものと思われた。土層の観察でも堆積の厚薄が見られ、溝状の様相を呈していた。南側の調査が実施されていないが、建物跡という環境から考えると区割り的な役割を果たしていた可能性が考えられる。

遺構に伴う遺物であるが、柱穴内から土師器、瓦片、陶磁器が出土している。数は少ないが、唯一年代を計れる陶磁器は、18～19世紀のものが含まれていた。6層内に包含される遺物については、須恵器、土師器、陶磁器、瓦片等々様々な遺物が混在する状況であった。陶磁器については17～18世紀のものが主流を占める状況で、近・現代のものは殆ど存在しない状況であった。瓦片については、平瓦が大半で、軒丸瓦、鬼瓦が見られるが、軒平瓦が1点も出土しなかったことは疑問が残る。特筆すべき遺物としては「熙寧元寶」の出土が挙げられる。この銅銭の出土は、延岡市で初めてのものとなった。また、土製品であるが延岡市では少量ながら出土は見られていたが、今回の犬形土製品は初めてのケースであった。この土製品については17世紀中頃のものと考えられる。

## 第2節　第2文化層（8層上面）の検証

調査では、数は少ないがやや大きい柱穴群を検出した。これらの柱穴は、上層とは規模の異なる建物が存在した可能性を示すが、構造的には掘建柱のものであることが明らかとなった。しかしながら、この面で検出した柱穴でも、建物の復元には至らなかった。

またこの面は井戸跡1、2や祭祀土坑、焼土坑を検出した面にあたる。井戸跡1、2、祭祀土坑は切り合いを生じており、前章でも述べたが井戸跡1構築中に崩落したため構築を断念し、埋土後その上部に38枚を数える「洪武通寶」を供え祭祀を行い、再び井戸跡2を構築したものであることが明らかとなった。延岡城や城下には現在も数多くの井戸跡が存在しているが、今回のような例は初めてのケースで非常に貴重な資料となった。また井戸跡2は、昭和45に建設された旧水道局集中管理棟建設の際、あえてこの井戸を破壊せずに建設している様子が伺い知れることから、少なくともこの時期までは開口していたものと考えられる。

遺構に伴う遺物であるが、柱穴から遺物は検出されなかった。祭祀土坑からは38枚を数える「洪武通寶」が、縦積みにされた状態で出土した。洪武通寶は、初鋳年を1368年とするが、祭祀土坑をそ

の年代と考えるには難しいであろう。祭祀土坑とほぼ同時期に構築されたと考えられる井戸跡２からは、陶磁器片、瓦片が出土している。井戸跡２は、長雨等による悪事により完掘できない状況であったが、出土した陶磁器は15～17世紀の中国景徳鎮窯系をはじめ、比較的同時期の陶磁器片が多く見られた。７層内に包含される遺物については、瓦質土器、土師器、陶磁器、瓦片等々様々な遺物が混在する状況であった。陶磁器については16～17世紀の中国製のものが主流を占める状況であった。

### 第３節　第３文化層（９層上面）の検証

調査では、数は少ないがやや大きい柱穴群を検出した。これらの柱穴は、上層と規模を同じくするものであると考えられる。構造的にはも、やはり掘建柱のものであることが明らかである。しかしながら、この面で検出した柱穴でも、建物の復元には至らなかった。

遺構に伴う遺物であるが、柱穴内から陶磁器、土錘が出土している。陶磁器は、14～15世紀の中国龍泉窯系のものである。８層内に包含される遺物については、量が少ないが14～15世紀を中心とした、中国製のものが主流を占める状況であった。特筆すべき遺物としては、改造鐚が挙げられる。この改造鐚は、室町後期から安土桃山時代にかけて鋳造られたものとされている。延岡市で初めての出土品である。

### 第４節　終わりに

今回の調査は、調査区の約1/2が破壊され、また遺構も少ない状況にありながら非常に貴重な資料を提供してくれる遺跡であった。遺構では、井戸廃棄に伴う祭祀土坑が初めて確認された。また遺物では、犬形土製品、銅銭の「熙寧元寶」、改造鐚が初めての出土となったことが挙げられる。

これまでの延岡城内の調査は12回を数えるが、各ポイントで異なる土層の堆積を見ることができ、また、その遺構面の時代をとらえる事に非常に困難な状況であった。今回の調査地は、比較的良好な土層堆積をしていたことから遺構面を３面と考え、遺物からその時代検証を試みた。おおよそ下層に進み時代は下っては行くが、遺物が混在する状況を見るとやはり「何時の時代」と確定することは困難であると、改めて痛感させられた。また、期待した江戸期の建物跡の確定についても、調査範囲の狭さや近代の破壊により詳細を掴むことはできない状況であったことは非常に残念であった。

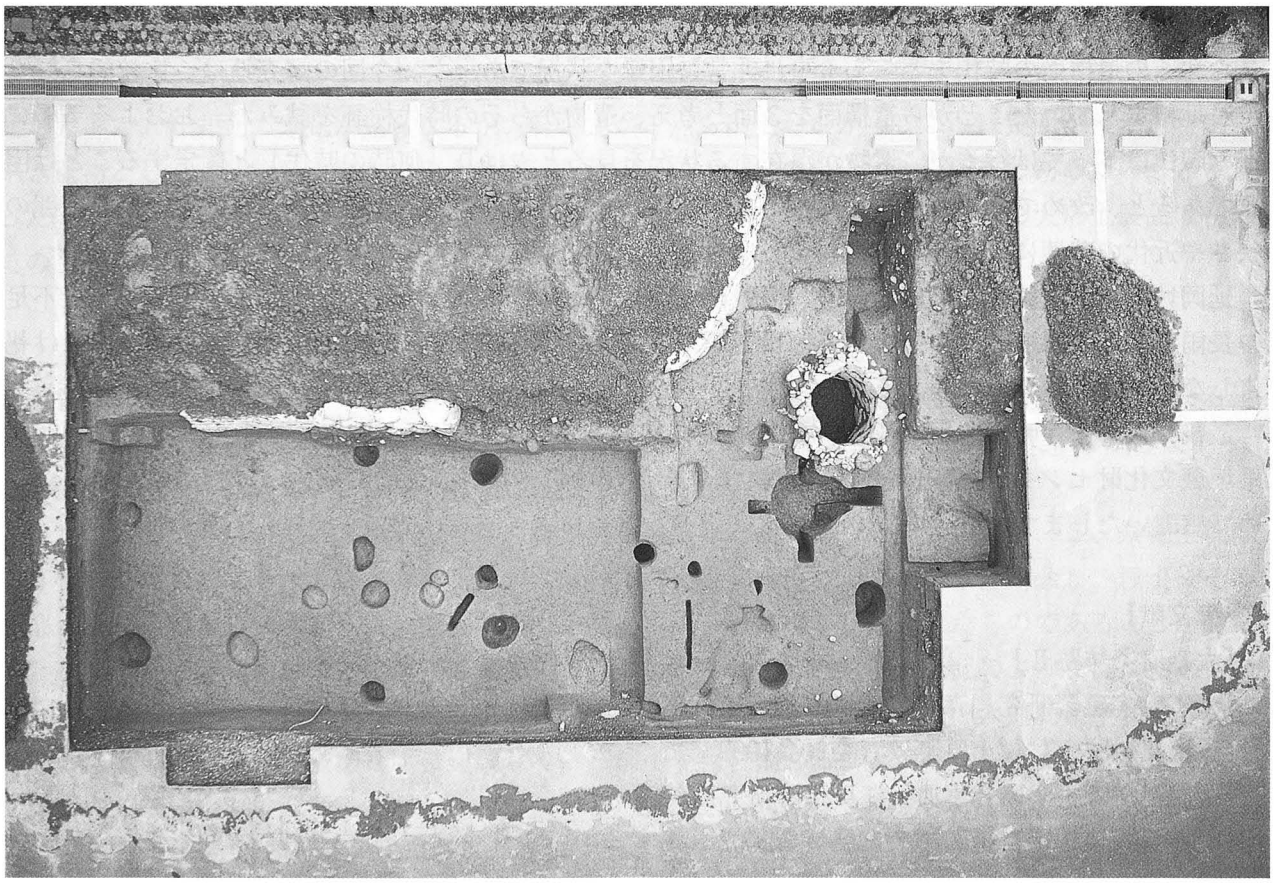
延岡城内遺跡（第13次）は、多くの情報を提供してくれる遺跡であったが、調査担当者の力量不足や長雨による悪事により十分な調査・報告ができていない。さらに、検討を進めて行き機会を設け報告しなければならないと考える。

最後になりますが、今回の調査・資料整理にあたっては、宮崎県教育庁文化課 松林豊樹氏、宮崎県埋蔵文化財センター 柳田晴子氏、同教育委員会 尾方農一氏に多大なご協力・ご指導を賜った。改めて感謝いたします。

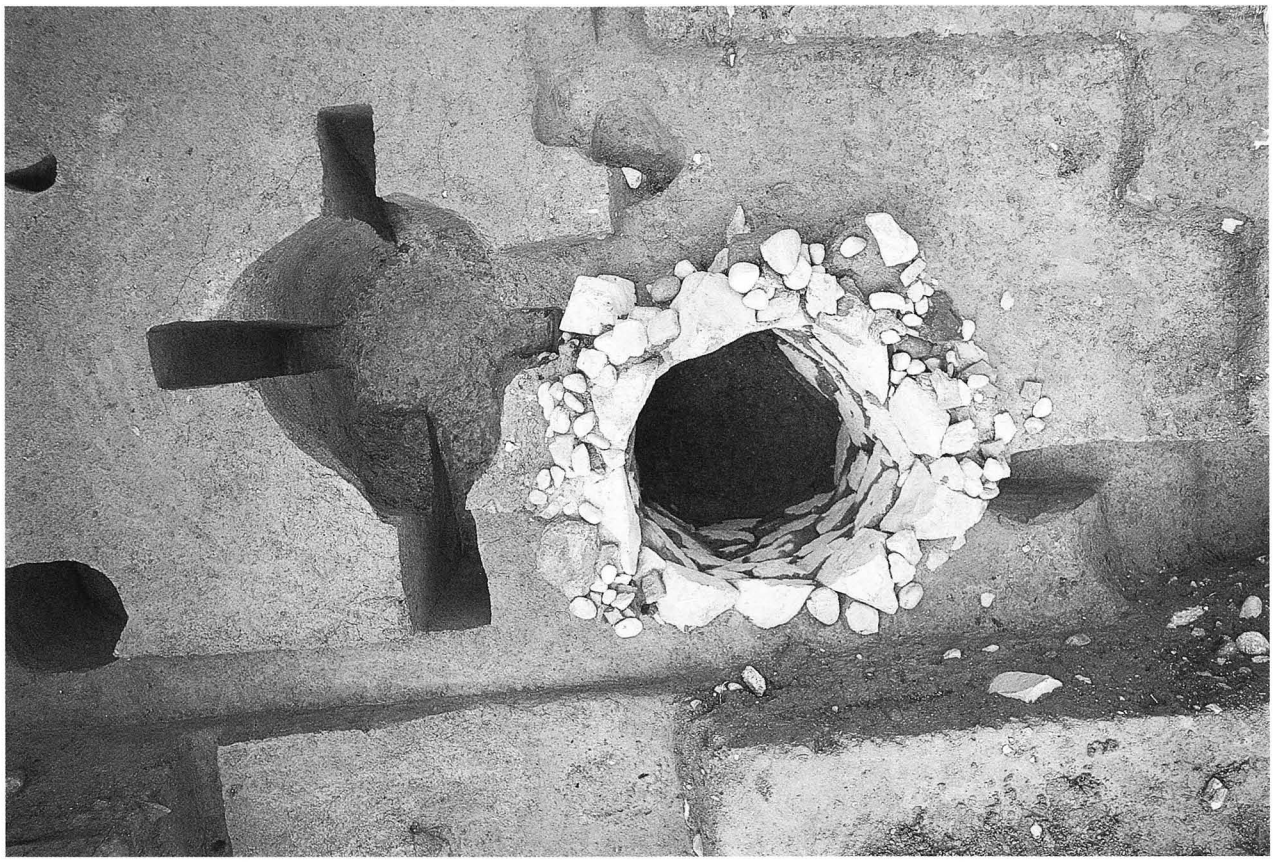
**【参考文献】**

『太宰府条坊跡Ⅱ』・『太宰府条坊跡ＸＶ』太宰府市教育委員会1983・2000
『太宰府陶磁器研究』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会1995
『佐土原城跡Ⅰ』佐土原町教育委員会1999
『図説江戸考古学研究事典』江戸遺跡研究会2001
『延岡城内遺跡Ⅰ』延岡市教育委員会2002

PL. 9　調査区全景１（西より）



PL.10　調査区全景２（垂直）



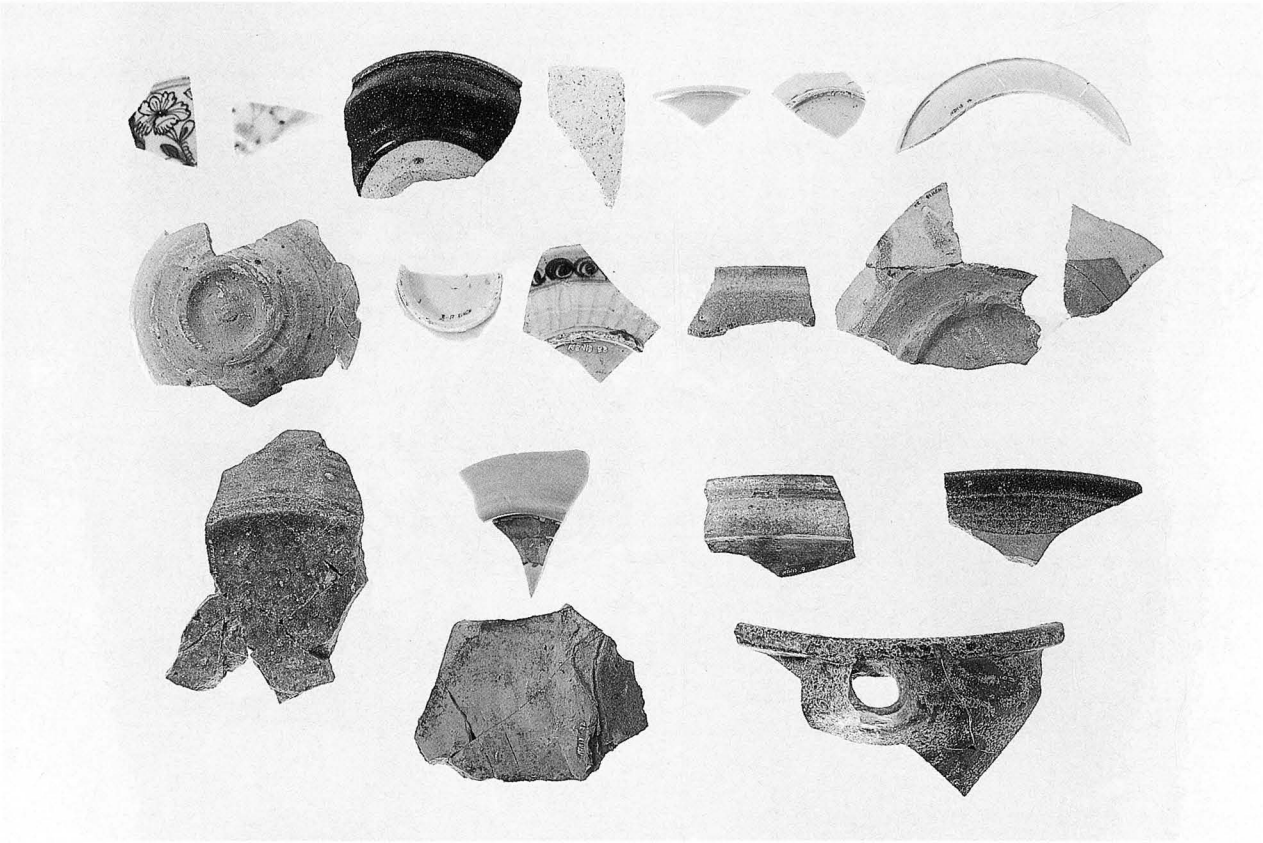
PL.11　井戸跡１．２　全景１（垂直）

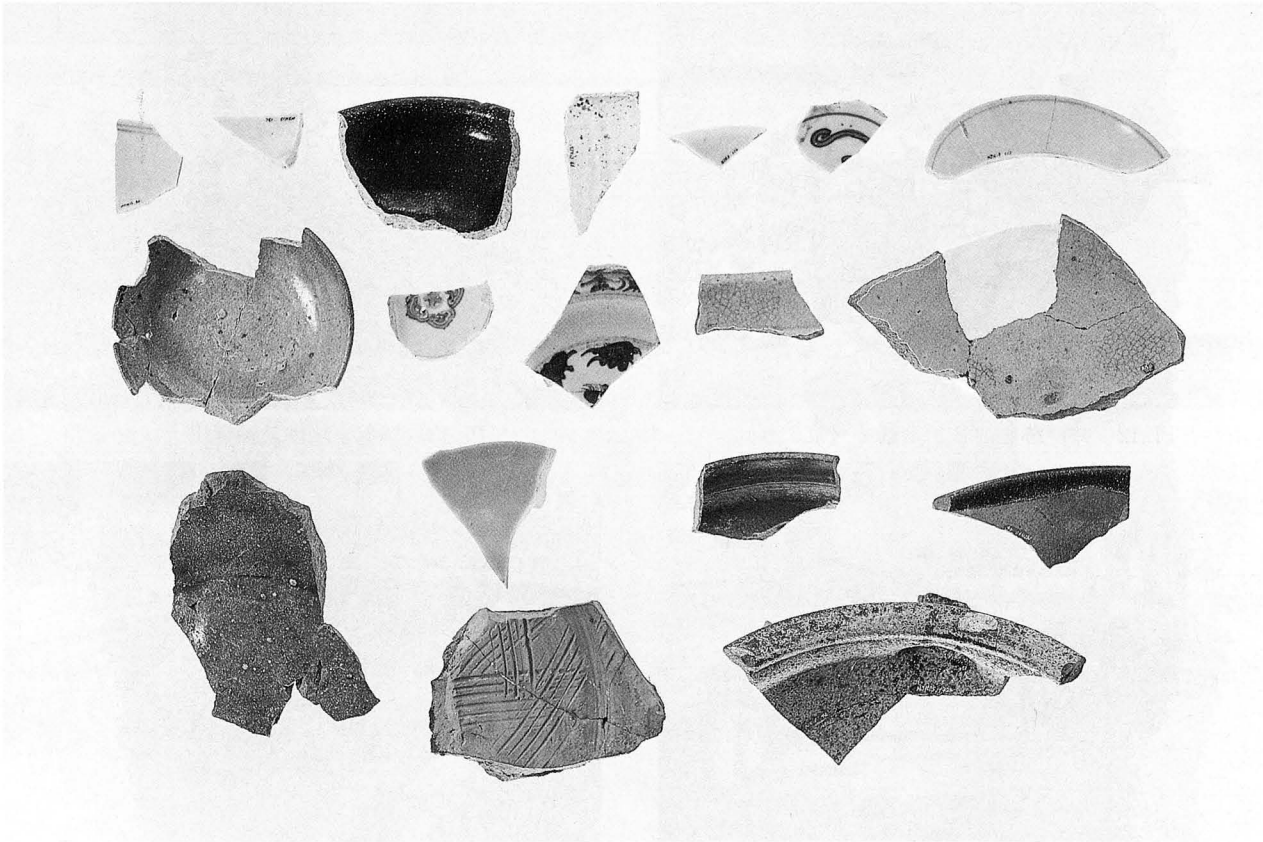
PL.12　井戸跡１．２　全景２（東より）

PL.13　祭祀土坑洪武通寶出土状況

PL.14　調査風景１

PL.15　調査風景２



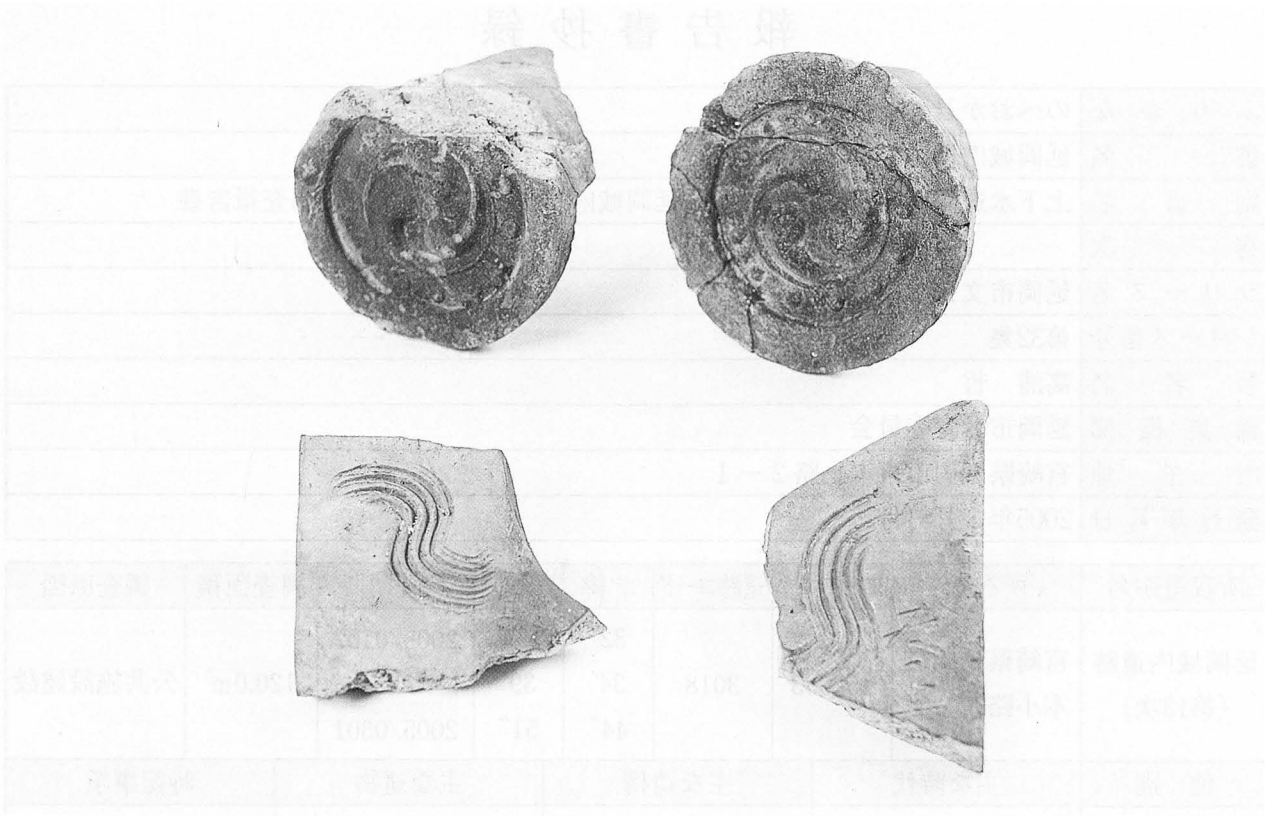


PL.16　出土遺物１（陶磁器）

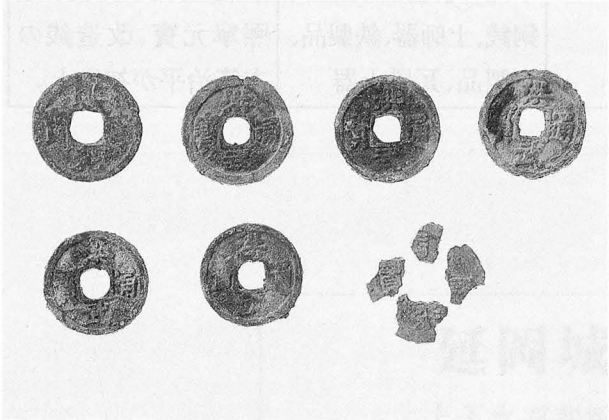
PL.17　出土遺物２（陶磁器）

PL.18　出土遺物３（土師器）

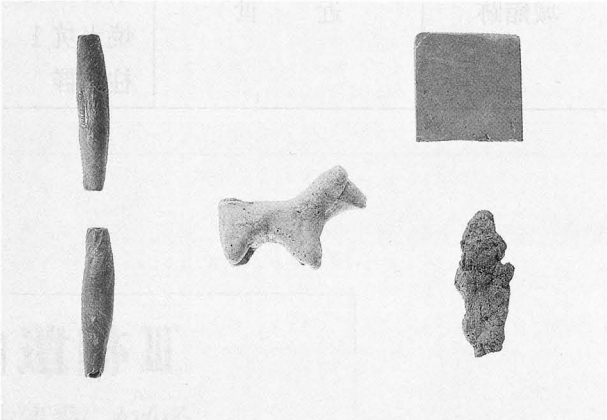
PL.19　出土遺物４（瓦質土器）



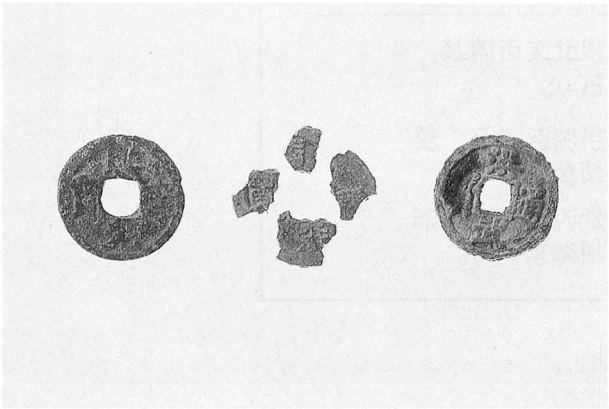
PL.20　出土遺物５（瓦類）



PL.21　出土遺物６（銅銭）



PL.22　出土遺物７（土・石・鉄製品）



PL.23　熈寧元寶・方篆治平・洪武通寶

PL.24　犬形土製品

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | のべおかじょうないいせき |
| 書名 | 延岡城内遺跡　Ⅲ |
| 副書名 | 上下水道課新庁舎建設にかかる延岡城内遺跡（第13次）発掘調査報告書 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 延岡市文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第32集 |
| 著者名 | 高浦　哲 |
| 編集機関 | 延岡市教育委員会 |
| 所在地 | 宮崎県延岡市東本小路２－１ |
| 発行年月日 | 2005年３月31日 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村コード | 遺跡コード | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 延岡城内遺跡（第13次） | 宮崎県延岡市本小路77－１ | 452033 | 3018 | 32°34′44″ | 131°39′51″ | 2005/0107～2005/0301 | 120.0㎡ | 公共施設建設 |

| 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|
| 城館跡 | 近世 | 井戸遺構２<br>祭祀土坑１<br>焼土坑１<br>柱穴群 | 瓦類（鬼瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦）、陶磁器、銅銭、土師器、鉄製品、石製品、瓦質土器 | 井戸を廃棄した際の祭祀土坑を初検出。熙寧元寶、改造銭の方篆治平が初出土。 |

# 延岡城内遺跡Ⅲ

上下水道課新庁舎建設にかかる
延岡城内遺跡（第13次）発掘調査報告書

延岡市文化財調査報告書第31集
2005年３月31日

発　行：延岡市教育委員会
宮崎県延岡市本小路２－１

印　刷：明巧堂印刷株式会社
宮崎県延岡市古川町82－10